三重県埋蔵文化財調査報告　２０２

森南田遺跡発掘調査報告

―― 久居市森町南田所在遺跡の調査 ――

２０００・３

三重県埋蔵文化財センター

序

今回発掘調査を行った森南田遺跡の所在する久居市森町には、県内においても著名な入田古墳をはじめとした遺跡が数多く存在します。

また、調査対象地は長野川と榊原川によって挟まれた河岸段丘上に位置しており、対岸に存在する入田古墳を望むことができます。入田古墳は、昭和40年に調査され、石室内に組合石棺が置かれていたことが判明しています。さらに、長野・榊原川の両河川は、下流において雲出川に合流し、各河川沿いに全ての時代の遺跡が存在していたことが窺えます。

かつて初瀬街道と呼ばれた現在の国道165号線は、入田古墳の直ぐ脇を走り上野地域と中勢地域を結ぶ交通の大動脈であり、森南田遺跡から東方の庄田地域内において南北に縦断する県道と交差する地点です。

このような地域における発掘調査は、久居市域に所在する遺跡について考える上で非常に重要です。こうした過去の歴史を振り返ることは、現在の我々の生活を過去から深く認識することでもあり、将来への発展の第一歩となります。

私たちは、これらの埋蔵文化財と呼ばれる文化遺産を保護し、後世に伝える義務を持っています。しかしながら、近年我々の生活向上につながる開発事業に伴い、破壊される遺跡が数多くあります。今後も、我々の最低限の責務である記録保存の発掘調査に努めると共に、新たな歴史的事実を積み重ねていきたいと思います。

なお、今回の報告書が森南田遺跡の理解と今後の文化財保護に活用されることを希望し、文化財保護行政に一層のご協力を頂くようお願いいたします。最後に、今回の発掘調査では、農林水産商工部農山漁村振興課・津地方県民局農林水産商工部をはじめ、地元の方々から様々な形でご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

平成12年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長　大　井　與　生

例　　言

1．本書は、三重県久居市森町字南田に所在する森南田（もりみなみだ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は次の体制により実施した。
調査主体：三重県教育委員会
調査担当：三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
技師　萩原　義彦
主事　城　吉基
調査面積：1,500㎡
調査期間：平成10年10月22日～平成11年1月11日

3．本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。執筆・編集及び遺構・遺物の写真は、萩原が担当した。

4．図版における方位は、国土調査法による第Ⅵ系座標を基準とし、方位は座標北を用いた。なお磁針方位は、西偏6°20′（昭和62年）、真北方位は、西偏0°18′である。

5．本書で記載した遺構・遺物に関する色調は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』（1997年度版）に拠っている。

6．挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

7．当発掘調査による図面・写真等の記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

8．本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。
ＳＡ：柵　　ＳＤ：溝　　ＳＥ：井戸　　ＳＫ：土坑　　Ｐ：柱穴

9．本調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産商工部より執行委任を受けて、平成10年度に農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴って実施したものである。調査にあたっては、三重県農林水産商工部農山漁村振興課、津地方県民局、中勢教育事務所ならびに地元各位の協力を得た。

10．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前言 …… 1
　1　調査契機 …… 1
　2　調査方法 …… 1
　3　調査経過 …… 1
　4　調査日誌 …… 1
　5　文化財保護法等による諸通知 …… 2
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 2
　1　位置 …… 2
　2　環境 …… 2
Ⅲ　遺構 …… 6
　1　地形及び基本的層位 …… 6
　2　検出遺構 …… 6
　（1）Ａ地区 …… 6
　（2）Ｂ地区 …… 10
Ⅳ　遺物 …… 12
　1　Ａ地区 …… 12
　2　Ｂ地区 …… 18
Ⅴ　まとめ …… 28

挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡位置図 …… 3
Fig. 2　調査区位置図 …… 6
Fig. 3　Ａ・Ｂ地区遺構平面図 …… 7
Fig. 4　Ａ地区東壁断面図 …… 8
Fig. 5　Ｂ地区北壁断面図 …… 9
Fig. 6　ＳＥ65平面・断面図 …… 10
Fig. 7　出土遺物実測図 …… 13
Fig. 8　出土遺物実測図 …… 14
Fig. 9　出土遺物実測図 …… 15
Fig. 10　出土遺物実測図 …… 16
Fig. 11　出土遺物実測図 …… 17
Fig. 12　出土遺物実測図 …… 19

表　目　次

Tab. 1　周辺遺跡一覧表 …… 5
Tab. 2　Ａ・Ｂ地区遺構一覧表 …… 11
Tab. 3　出土遺物観察表 …… 20
Tab. 4　出土遺物観察表 …… 21
Tab. 5　出土遺物観察表 …… 22
Tab. 6　出土遺物観察表 …… 23
Tab. 7　出土遺物観察表 …… 24
Tab. 8　出土石器観察表 …… 24
Tab. 9　出土石製品観察表 …… 24
Tab. 10　出土金属製品観察表 …… 24
Tab. 11　出土土錘観察表 …… 24
Tab. 12　出土土錘観察表 …… 25
Tab. 13　出土土錘観察表 …… 26
Tab. 14　出土土錘観察表 …… 27

写　真　図　版

ＰＬ．1　Ａ地区北側完掘全景 …… 30
　Ａ地区南側完掘全景 …… 30
　Ａ地区ＳＤ18完掘状況 …… 30
　Ａ地区ＳＤ18遺物出土状況 …… 30
ＰＬ．2　Ｂ地区北側完掘全景 …… 31
　Ｂ地区南側完掘全景 …… 31
　Ｂ地区ＳＥ65完掘状況 …… 31
　森南田遺跡遠景 …… 31
ＰＬ．3　出土遺物 …… 32

Ⅰ　前　　言

1　調査契機

調査対象地は、既にほ場整備事業が終了し整然とした水田と集落が存在している。しかし長野川と榊原川の両河川に挟まれた地域である為、集落から国道ないし県道への往来に支障がある。その為、水田地帯を横切る農道整備事業が計画された。それらの経緯によって、平成10年１月に久居市森町字南田において試掘調査を実施し、遺構（土坑・溝）・遺物を確認した。その結果、当地が遺跡と判断され、発掘調査を行うことになった。

調査地の西側は長野川、東側は榊原川が南流し、調査区の南方地点で合流する。調査地の西側から南側にかけて長野川沿いに国道165号線が通っている。現況は、水田もしくは畑である。

2　調査方法

調査に際しての４ｍ方眼の地区設定については、任意の設定を行い、東西方向にアルファベット（南から北へＡ、Ｂ、Ｃ……）、南北方向に数字（西から東へ１、２、３……）を設定し、各グリッドの北西隅の名称をそのグリッド名とした。また、遺構番号はＡ・Ｂ地区を通じて１番から付けている。

3　調査経過

調査区は、現道部分を挟んで、約70×10ｍの半月形のＡ地区と約130×10ｍのレンズ形のＢ地区の２地区に分けて、南側のＡ地区から重機による掘削を行った。現地調査は平成10年10月22日から開始し、平成11年１月11日に終了した。最終的な調査面積は、1,500㎡である。

作業にあたっては、以下の方々の協力によって無事に調査を終えることができ、心から感謝の意を表したい。

池村あさ・牛場ミス子・枝川英美子・垣野幸子・川村佳代子・川本美代子・川原田嘉代子・川原田はる子・小林いく子・駒田武雄・杉山すず子・庄山一子・武部孝子・武部容子・田中千代子・田中ミス子・辻田たつの・中川弘・西田文子・林知子・堀内美江子・前田秀子・森口てる子・森田キヨ・宮田つや子

4　調査日誌

９月中　津地方県民局と調査前の事前協議（農業基盤整備二グループ：前川、埋文センター：竹内、萩原、城）。

10／22　機材搬入後、Ａ地区表土掘削開始。

10／26・27　引き続きＡ地区表土掘削。表土掘削終了後に地区設定（任意）。

10／28　Ａ地区に作業員投入。Ａ地区排水溝切り及び包含層掘削・遺構検出を行う。

10／29　Ａ地区遺構掘削・遺構略測図作成（１／100）。

11／４～６　Ａ地区包含層・遺構掘削。

11／９～13　Ａ地区の自然流路状の大溝掘削（ＳＤ18）。

11／16　Ａ地区清掃後写真撮影。

11／17　午前中、写真撮影。午後から遺構平面図作成の為の割り付けを行う。（坂倉・城・萩原）

11／18　Ａ地区平面図作成（１／20）。

11／19　Ａ地区平面図にレベルを入れる作業。（坂倉・城・萩原）

11／20　Ａ地区東・西壁断面図作成（１／20）。Ｂ地区表土掘削開始。

11／24　Ｂ地区表土掘削、掘削土置場を確保できない為、２ｔダンプによって搬出。Ａ地区は、引渡終了。

11／25　Ｂ地区表土掘削終了後、地区設定を行う（地区は、Ａ地区の延長によって設定）。（坂倉・城）

11／26　作業員による手掘り作業再開。Ｂ地区排水溝掘削。包含層を掘削開始。

11／27・30　Ｂ地区包含層掘削、遺構検出・掘削。30日午後から調査第１課会議。

12／１・２　Ｂ地区遺構検出・掘削。

12／3　B地区遺構検出・掘削。午後から雨の為、作業中止。
12／4　B地区遺構検出・掘削。
12／7　B地区遺構検出・掘削。午後から雨の為、作業中止。
12／8～10　B地区遺構検出・掘削。
12／11　B地区清掃後東西方向から写真撮影。
12／14　B地区実測の為の割り付け作業を行う。
12／15　B地区平面実測作業（1／20）（中川・城・萩原）。
12／16　B地区下層遺構検出のため包含層掘削。
12／17～25　B地区下層掘削終了後、写真撮影。
1／5・6　B地区下層遺構平面図作成（1／20）。実測終了部分からレベル入れにはいる。（城・萩原）
1／7　調査区外に排出した遺構埋土の調査区内に戻す作業を行う。
1／8　機材一式撤収。
1／11　B地区引渡。

5　文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下によって行っている。

・法第57条の3第1項（文化庁長官宛）
平成10年9月30日付農振第460号（県知事通知）
・法第98条の2第1項（文化庁長官宛）
平成10年10月23日付教埋第284号（県教育長宛）
遺失物法第1条第1項の規定にかかる文化財発見・認定通知
平成11年1月20日付教生第2－15号（久居警察署長宛）
平成10年3月17日付教埋第11－59号（県教育長通知）

Ⅱ　位置と環境

1　位置

伊勢平野のほぼ中央部を東流する雲出川は、三重・奈良県境にある高見山地三峰山付近を源流とし、大きな蛇行を繰り返しながら伊勢湾に達している。

久居市は、伊勢平野の中央部に位置している。行政区画上において北は津市、北東で美里村、西は布引山脈で白山町に、南は雲出川に沿って嬉野町・三雲町・一志町に接している。

久居市の地質は、概して3種類に区分される。1番目は布引山脈から榊原、稲葉、一色、森、羽野にかけての山間部で、第三紀層からなり、2番目は雲出川によって形成された戸木、久居、牧、川方、新家にかけての段丘堆積層で第四紀古層からなる。3番目は谷杣、下稲葉塩見坂付近、中村、庄田、中川原、小戸木、須ケ瀬、元町の低地、牧、新家の低地、木造南方付近の雲出川及び支流の長野川・榊原川によって形成された氾濫の沖積層で第四紀新層である。また、2番目の段丘堆積層では三段の段丘面が認められる。最も高い段丘面は市東部の羽野付近、次に高い段丘面は市北部の諸戸山付近、一番低い面が久居市街地付近である。

今回の発掘調査対象地は、久居市東部の段丘堆積層にあたり、長野川と榊原川の両河川によって形成された標高20～21mの河岸段丘上に位置する。

2　環境

久居市下において旧石器時代に比定されている遺跡はない。しかし、細石刃核が東出Ⅰ遺跡（1）[①]で出土している。そのことから実際には、多くの遺跡が存在する可能性を秘めている。

主だった久居市域の縄文時代の遺跡は、東出Ⅰ遺跡・下村遺跡（2）[②]、木造赤坂遺跡（3）[③]・大口遺跡（4）[④]・上野遺跡（5）[⑤]があり、周辺には下村五間田遺跡（6）[①]・稲里遺跡（7）・湯出谷遺跡（8）・宮ノ広遺跡（9）・戸塚遺跡（10）・西池田遺跡（11）等がある。

元町字東出に位置する東出遺跡は、旧石器時代のみならず石鏃、石槍が出土している。榊原町下村の東端の丘陵畑地にある下村遺跡では、縄文土器、石鏃、石槍が出土している。

木造赤坂遺跡は、昭和38年に木造町赤坂の桃園小学校の東側で耕地整理中に発見された。そのため、昭

和38年に発掘調査が行われ弥生時代の遺構の下層から縄文時代後期の土器が出土し、一躍県内屈指の遺跡となった。平成９年度に試掘調査が行われ、溝・ピットが確認されている。

大口遺跡は、井戸山町に所在する。かつて、開墾の際に有茎尖頭器、石鏃、石槍が出土するだけでなく、数多くの石器の剥片も出土している。

弥生時代の遺跡には、本宮遺跡（12）[⑥]・木造赤坂遺跡・長持元屋敷遺跡（13）[⑦]・垣内遺跡（14）[①]・上木造遺跡（15）[①]・牧遺跡（16）[⑧]・上野遺跡があり、周辺には、中ノ山南遺跡（17）、中村遺跡（18）、稲初垣内南遺跡（19）などがある。上述した木造赤坂遺跡では、竪穴住居（弥生後期から古墳時代）が確認されている。遺物では、弥生後期の壺、高杯、石斧、凹石が出土している。

本宮遺跡は、野村町の宮池の南方に位置している。かつて昭和25年に石槍、石錐、土錘が出土している。この遺跡から南西に約100ｍ離れた地点において石匙が出土している。

長持元屋敷遺跡は、新家町に位置する面積約12,000㎡の広大な遺跡である。かつて昭和53・54年に発掘調査が行われ、弥生時代から江戸時代の遺構・遺物が確認されている。弥生時代では、前期の方形周溝墓、竪穴住居２棟が確認されている。

垣内遺跡は、元町字垣内に所在する遺跡である。かつて昭和44年に発掘調査が行われ、高杯、壺が出土している。弥生時代中期以降のものであろうか。

上木造遺跡は、昭和34年木造全域において耕地整理が行われた際に完形の弥生土器が多数出土したと言われている。

赤色の土器が出土したと言われる牧遺跡は、昭和

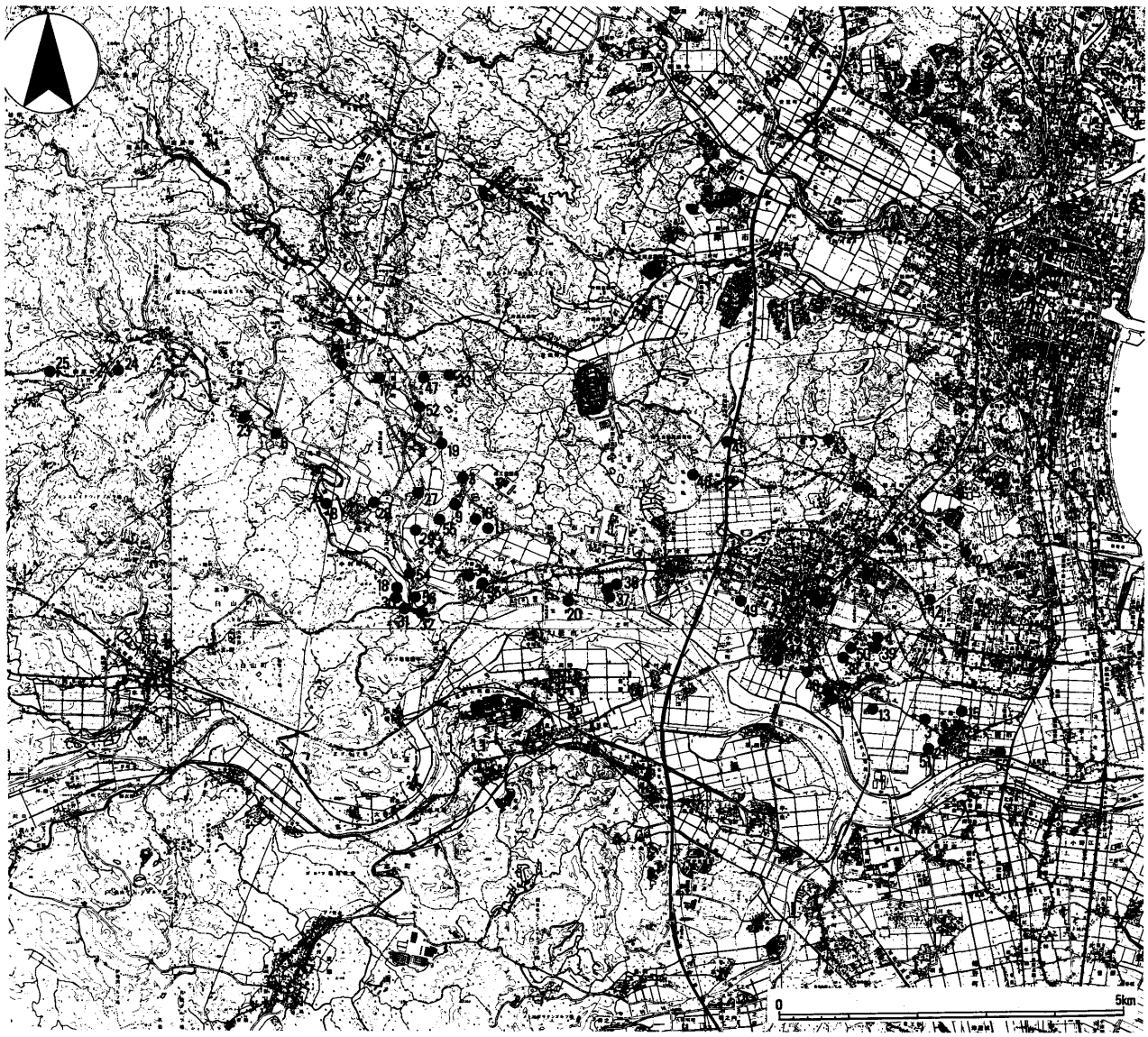


Fig. 1　遺跡位置図（1／100,000）　国土地理院発行　1／50,000「津西部・津東部・二本木・大仰」より

59年に試掘調査が久居市教育委員会によって行われている。その結果柱穴や溝が確認されている。

戸木町に所在する上野遺跡は、縄文から古墳時代にわたる複合遺跡である。石鏃、石匙、石錘、石斧、弥生土器が出土している。弥生土器は、口縁頸部にヘラ描き沈線、波状文が施されていたといわれ、弥生時代中期のものとみられる。

古墳時代における遺跡は、多くみることができ、古墳についてみるとやや久居市域西部に偏っている。とりわけ、前期古墳を含むと考えられる戸木町に所在する善応寺古墳群(20)[9](久居市史によると15基の古墳が存在していたとみられるが現在は9基である)の1号墳(前方後円墳)、および四獣形鏡とみられるものを含めた3面の鏡が出土した古墳(1号墳と同一の可能性もあるが)、木造町所在の碧石製合子(引接寺所蔵)が出土した大塚山古墳(21)[10]、鏡2面・硬玉管玉、ガラス小玉が出土した木造里中古墳(22)[11]は、非常に重要である。これらを除いてその他の古墳は、古墳時代後期に属しているとみられる。

まず、森南田遺跡から北・北西方向の長野川・榊原川の上流域からみてみる。榊原町地域には、宝林寺古墳(23)[12](前方後円墳の可能性もある南北6m、東西9mの円墳)、消滅している茶臼山古墳(24)[13](円墳)、坂井古墳群(25)[14](円墳2基)、稲葉町地域では、清水古墳(26)[15](1辺約6mの方墳)、消滅したが横穴式石室があった下河野古墳群(27)[16](円墳3基)がある。

長野川右岸域・榊原川左岸域の一色町には、円墳2基の本郷古墳群(28)[17]、円墳9基によって構成される一色山古墳群(29)[18]がある。榊原川右岸域の中村町には、径約11m前後の円墳で奥行3.8m、幅1.2mの横穴式石室が存在する前岡古墳(30)[19]、かつて大正年間に首飾り、直刀、須恵器が出土し、1辺約10m前後の方墳1基を含む日向古墳群(31)[20]、昭和40年に発掘調査が行われ、組合石棺が確認された入田古墳(32)[21]、長野川右岸域森町に所在する円墳で石室を有する北谷古墳(33)[22]がある。

長野・榊原川両河川が雲出川に合流する地点の左岸域の庄田町には、円墳とみられる沓掛古墳(34)[23]、その南側にほぼ1直線に並ぶように8基の円墳が存在する庄田古墳群(35)[24]がある。

下流にくだり戸木町羽野に所在する善応寺山古墳群、かつて15基の古墳が存在したが現在8基で構成される上野古墳群(36)[25]は、昭和4年に調査が行われ陶棺片、金環、鉄刀が出土している。2基の古墳が全て消滅している元儀八山古墳群(37)[26]がある。

さらに雲出川をくだりやや内陸部に位置する新家北方古墳群(38)[27]は、金環、紫ルリ玉、鉄刀、須恵器が出土している。その直ぐ東方に行成古墳(39)[28]がある。また、須恵器の壺・杯身・高杯が出土した牧古墳群(40)[29]は、円墳5基によって構成される。牧古墳群を左手に見ながらなお、雲出川を下ると木造町に至る。ここには、前述した大塚山古墳・木造里中古墳があり、津市雲出島貫町に至る。

一方、久居市街地北方から津市との市町村境にかけての地域では、北谷古墳東方の風早池周辺においては、池原古墳、北興古墳、狐塚古墳などが所在したが現在は開発されてしまってみる影もない状況である。さらにやや南西方向に西から野村高地古墳群(41)[30]、稲荷塚古墳(42)[31]が点々と所在する。

北東方向に円筒埴輪が墳麓に巡っていることが知られる大釜池古墳(43)[32]が存在する。

これら古墳群に供給される遺物の中で須恵器・埴輪など生産に係わる窯址についてみると藤ケ丘町に所在する久居古窯址群(44)[33]は、非常に重要な遺跡である。この遺跡は、昭和38・43年の2回にわたって発掘調査が行われ、窯址群は4基からなり、須恵器杯・高杯・壺・提瓶・瑞・擂鉢・甕などの多器種にわたり、また円筒埴輪、形象埴輪が出土している。それらの成果から久居古窯址群は、県内の須恵器生産遺跡として最も古く5世紀後半と考えられている。また、風早池周辺に北池原古窯址(45)[34]・狐塚古窯址(46)[35]がある。集落についてみると木造赤坂遺跡からS字状口縁台付甕が出土している。長持元屋敷遺跡では、土坑、古墳?が確認されている。

奈良時代から平安時代に至っては、遺跡の数がかなり減少する、奈良時代とみられるものは、竪穴住居が13棟出土した長持元屋敷遺跡・北出遺跡(47)・里ノ内遺跡(48)・二子前遺跡(49)・行成北方遺跡(50)・井出ノ上遺跡(51)、平安時代では、長田遺跡(52)・横造遺跡(53)に限られてしまっている。

平安時代末期になると武士が台頭し、鎌倉幕府の成立後も伊勢において平家の残党による反乱が起きる。「吾妻鏡」に記載されている反乱を起こした庄田氏は、現在の庄田町一帯を支配していたと考えられる。また、鎌倉幕府滅亡後南北朝の動乱期においてこの地域は伊勢国司である北畠氏の支配下に置かれるようになる。中でも北畠氏の一族である木造氏が木造城を中心とし、次第に勢力を広げ雲出川北岸にまで支配領域を広げてゆくようになる。こうした状況下において戦国時代を至り、織田信長の侵攻を迎える。北畠氏は、織田信長と対立後その勢力を失うが、木造氏は、紆余曲折して織田秀信に仕える。

鎌倉から室町時代の周辺遺跡では、森町内に森垣内遺跡（54）・世古出東遺跡（55）があり、屋敷跡とみられる掘立柱建物が検出された長持元屋敷遺跡を含めかなり多くの遺跡が存在する。

後に遺跡周辺地域は、慶長13年（1608年）の藤堂氏の支配を受け、寛文9年（1669年）、藤堂高通が現在の久居（かつては野辺と呼ばれた地）に分封され久居藩として成立し、藩領となる。

〔註〕
①～⑤・⑨～㉟『久居市史・上巻』久居市役所　1972年
③『三重県埋蔵文化財年報－平成9年度－』　三重県埋蔵文化財センター　1998年
⑥『久居市史・上巻』久居市役所　1972年
『本宮遺跡試掘調査報告』本宮遺跡調査会　1973年
⑦『久居市史・上巻』久居市役所　1972年
辻富美雄『長持元屋敷遺跡発掘調査報告』　久居市教育委員会　1980年
⑧『久居市史・上巻』久居市役所　1972年
辻富美雄『牧遺跡試掘調査報告』　久居市教育委員会　1984年

上記以外に参考として
- 河瀬信幸『三重県埋蔵文化財調査報告87－Ⅱ』近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査　報告第3分冊5「戸木遺跡」三重県埋蔵文化財センター　1991年
- 小玉道明・古村利男『戸木城址発掘調査報告』久居市教育委員会　1979年
- 『三重県の地名』日本歴史地名大系24　平凡社1983年
- 「一志郡善応寺山1号墳について－三重県主要　古墳調査－」『ふびと』第29号　三重大学歴史研究会原始古代史部会　1968年

Tab. 1　遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	東出遺跡	15	上木造遺跡	29	一色山古墳群	43	大釜池古墳
2	下村遺跡	16	牧遺跡	30	前岡古墳	44	久居古窯址群
3	木造赤坂遺跡	17	中ノ山南遺跡	31	日向古墳群	45	北池原古窯址群
4	大口遺跡	18	中村遺跡	32	入田古墳	46	狐塚古窯址群
5	上野遺跡	19	稲初垣内南遺跡	33	北谷古墳	47	北出遺跡
6	下村五間田遺跡	20	善応寺山古墳群	34	沓掛古墳	48	里ノ内遺跡
7	稲里遺跡	21	大塚山古墳	35	庄田古墳群	49	二子前遺跡
8	湯出谷遺跡	22	木造里中古墳	36	上野古墳群	50	行成北方遺跡
9	宮ノ広遺跡	23	宝林寺古墳	37	元儀八山古墳群	51	井出ノ上遺跡
10	戸塚遺跡	24	茶臼山古墳	38	新家北方古墳群	52	長田遺跡
11	西池田遺跡	25	坂井古墳群	39	行成古墳	53	横造遺跡
12	本宮遺跡	26	清水古墳	40	牧古墳群	54	森垣内遺跡
13	長持元屋敷遺跡	27	下河野古墳群	41	野村高地古墳群	55	世古出東遺跡
14	垣内遺跡	28	本郷古墳群	42	稲荷塚古墳	56	森南田遺跡

Ⅲ　遺　　構

1　地形及び基本的層位

今回の調査地は、榊原川・長野川によって形成された標高20～21ｍの河岸段丘上である。調査区は、現道によってＡ・Ｂ地区に分割され、全体的に俯瞰するとＳ字形である。

Ａ・Ｂ地区の現況は、耕地整理によって整然とした畑・水田であり、基本的層位は耕作土直下で遺構面となる。Ｂ地区側は、遺構面下に下層遺構が存在した。また、Ａ地区は耕地整理によってかなりの削平を受けたとみられ遺構面上にその痕跡を認めることができた。

2　検出遺構

遺構については、主なものについて記述し、その他のものについては遺構一覧表に詳細を記載した。

（1）Ａ地区

この地区で検出された遺構には、古墳～奈良・鎌倉～室町時代にかけてのものがある。各時代の主な遺構について、以下に概要を記す。

ａ　古墳～奈良時代

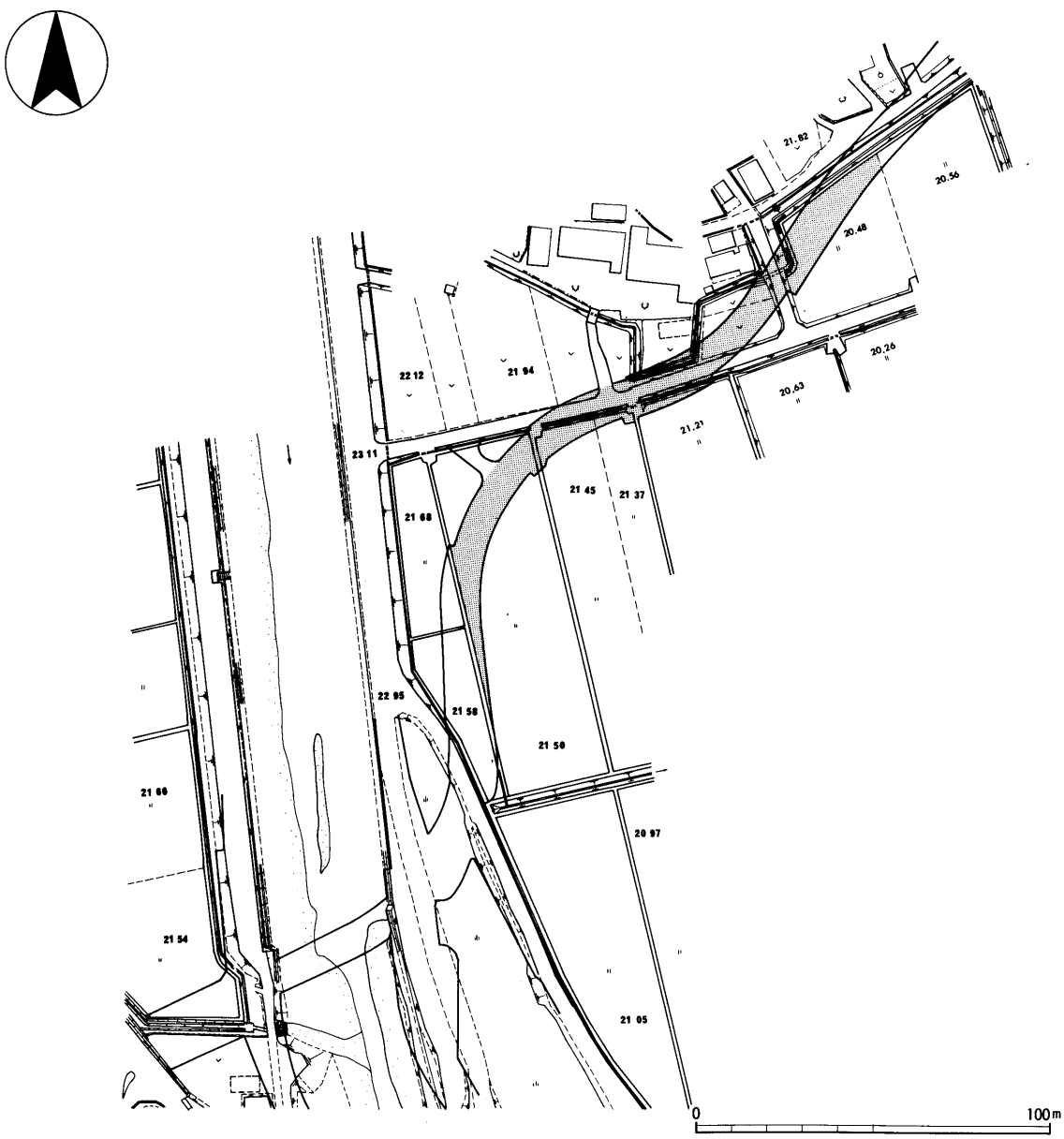


Fig. 2　調査区位置図（1／2,000）

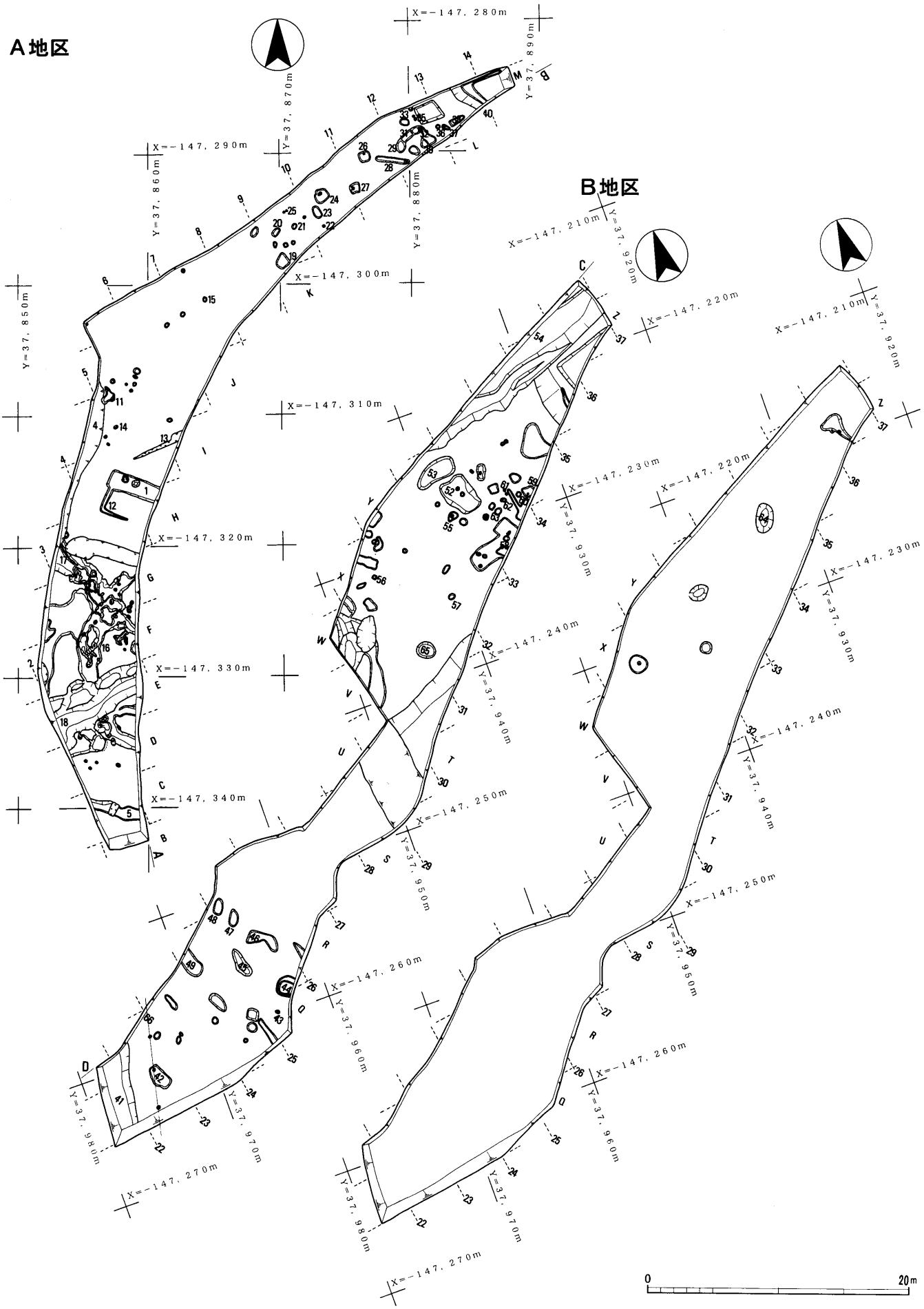
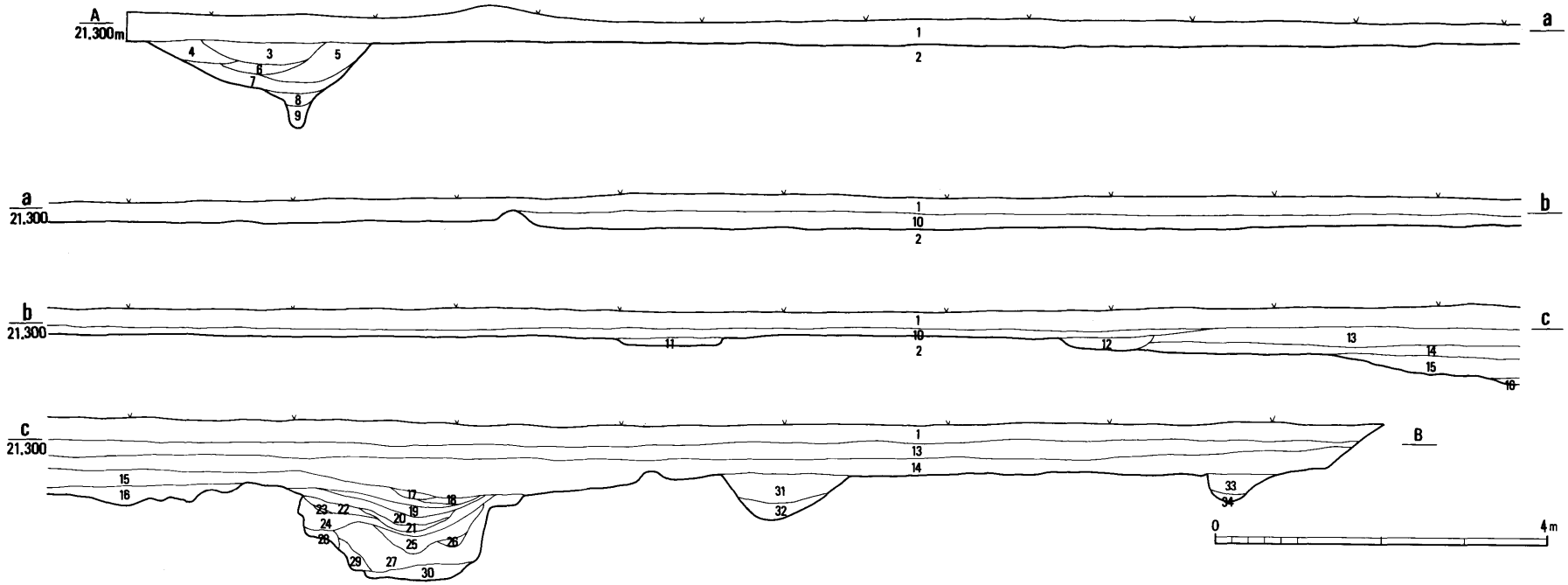
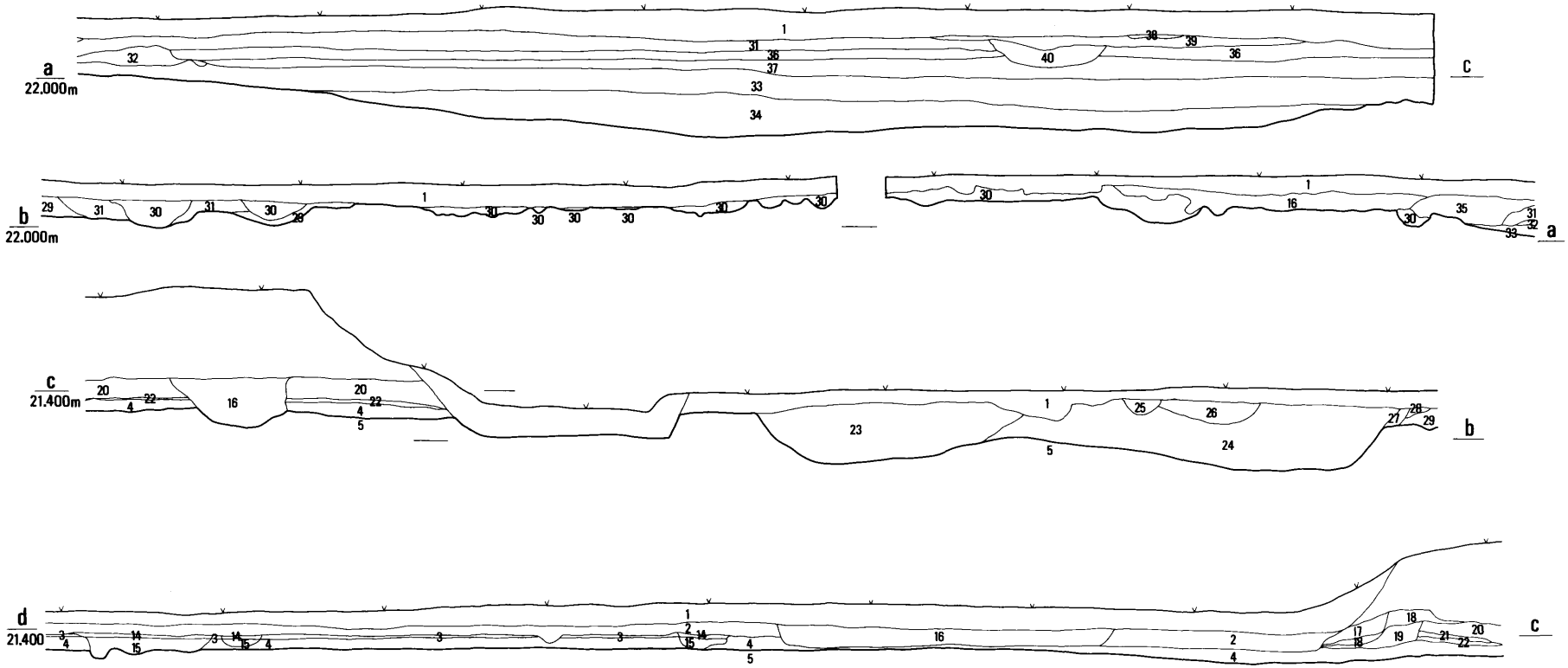


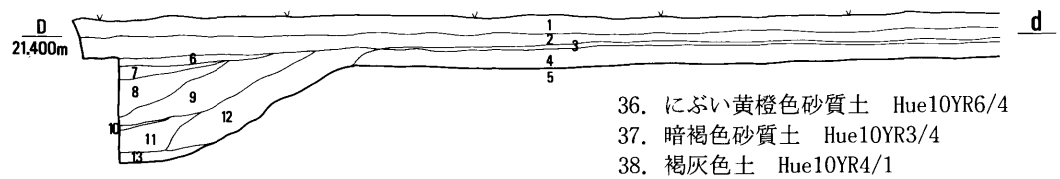
Fig. 3　A・B地区遺構図（1／400）



1．水田耕作土
2．明黄褐色土（地山） Hue10YR6/8
3．黄褐色土（褐灰色混り） Hue10YR5/8
4．灰黄褐色土 Hue10YR4/2
5．暗赤褐色土 Hue5YR3/2
6．褐灰色砂 Hue7.5YR4/1
7．褐色土 Hue10YR4/6
8．にぶい黄褐色土 Hue10YR4/3
9．暗褐色土 Hue10YR3/4
10．黄色土 Hue5Y7/8
11．褐色土 Hue10YR4/4
12．オリーブ色土 Hue5Y6/6
13．褐灰色粘質土 Hue10YR5/1
14．黄色砂質土 Hue2.5Y8/8
15．灰黄色砂 Hue2.5Y7/2
16．灰白色砂 Hue2.5Y8/2
17．灰白色砂 Hue2.5Y7/1
18．灰白色微砂 Hue2.5Y7/1
19．浅黄色砂 Hue2.5Y7/4
20．黄灰色砂 Hue2.5Y5/1
21．にぶい褐色砂 Hue7.5YR6/3
22．にぶい褐色細砂 Hue7.5YR6/3
23．暗褐色砂 Hue7.5YR3/4
24．褐灰色砂 Hue7.5YR6/1
25．灰褐色砂 Hue7.5YR5/2
26．灰色砂 Hue5Y6/1
27．灰オリーブ色砂 Hue5Y6/2
28．灰色砂 Hue5Y5/1
29．オリーブ黄色砂 Hue5Y6/3
30．暗灰黄色粘土 Hue2.5Y5/2
31．灰白色砂 Hue2.5Y8/2
32．浅黄色 Hue2.5Y7/4
33．灰黄色砂 Hue2.5Y7/2
34．灰白色砂 Hue2.5Y8/2

Fig. 4　A地区東壁断面図（1／80）





1．耕作土
2．水田耕作土
3．黄褐色粘質土　Hue2.5Y5/6
4．明黄褐色粘質土　Hue2.5Y6/8
5．黄褐色土　Hue2.5Y5/6
6．褐色土　Hue10YR4/4
7．褐灰色砂質土　Hue10YR5/1
8．にぶい黄褐色土　Hue10YR4/3
（褐灰色砂混）
9．褐灰色砂質土　Hue10YR4/1
10．褐色粘土　Hue10YR4/6
11．褐灰色粘土　Hue10YR4/1
12．褐灰色粘質土　Hue10YR4/1
13．褐灰色粘土　Hue10YR4/1
（暗褐色土混）
14．黒褐色粘質土　Hue2.5Y3/1
15．黄灰色砂質土　Hue2.5Y4/1
16．褐灰色砂質土　Hue10YR5/1
17．黄灰色砂　Hue2.5Y6/1
18．黄灰色粘土　Hue2.5Y6/1
19．黄灰色砂質土　Hue2.5Y6/1
20．灰黄色砂　Hue2.5Y6/2
21．黄褐色土　Hue2.5Y5/6
22．黄灰色粘質土　Hue2.5Y6/1
23．オリーブ褐色粘質土　Hue2.5Y4/3
24．黄褐色粘質土　Hue2.5Y5/6
25．黄灰色砂質土　Hue2.5Y4/1
26．黒褐色粘質土　Hue2.5Y3/1
27．暗オリーブ褐色土　Hue2.5Y3/3
28．黒褐色礫　Hue2.5Y3/2
29．黒色粘土　Hue2.5Y2/1
30．黒褐色土　Hue10YR7/1
31．明黄褐色粘質土　Hue10YR6/6
32．青灰色粘質土　Hue5B5/1
33．暗褐色砂礫土　Hue10YR3/4
34．黒褐色粘質土　Hue10YR2/2
35．青灰色土　Hue5B5/1
36．にぶい黄橙色砂質土　Hue10YR6/4
37．暗褐色砂質土　Hue10YR3/4
38．褐灰色土　Hue10YR4/1
39．褐灰色土　Hue10Y6/1
40．褐灰色砂　Hue10YR5/1

Fig. 5　B地区北壁断面図（1／80）

ＳＤ16・17　調査区南側に位置し東西方向に流れる自然流路である。規模は、定まっていない。そのため、一定の流量があったと考え難く、むしろある期間に時折流れていたと考える方が妥当ではなかろうか。遺物には、須恵器蓋・杯・甕・土師器杯・皿など山茶椀を含む多くの土器が出土している。山茶椀が出土しているのは、埋没する時期を示すものであろう。

ＳＤ18　ＳＤ16・17の南側にある東西方向の溝である。溝の規模は、検出長約４ｍ、幅約２ｍ、深さ約１ｍである。断面形状は、ゆるやかなＵ字形を呈している。ＳＤ16・17に一部接続しており、ＳＤ16・17を含めたなかでの主流として考えられる。遺物は、土師器杯・須恵器蓋・杯・甕・壺・瓶等が出土している。

ＳＤ16・17・18の遺構の性格としては、自然流路と考えられるが、埋土内に土師器・須恵器などの出土遺物が非常に多く、単純に廃棄されたと考えるのは難しく、水に対する何らかの祭祀的要素を持ちうる可能性も捨てきれない。

b　鎌倉～室町時代

ＳＤ40　調査区北側に位置し、南北方向に流れる溝である。溝の規模は、幅約1.5ｍ、深さ1.1ｍである。断面形状は、Ｖ字形を呈している。

出土遺物には、軒丸瓦・山茶椀がある。

(2) Ｂ地区

この地区で検出された遺構には、鎌倉～室町時代にかけてのものがある。主な遺構については、時期不明なものによって占められている。以下に概要を記す。

a　鎌倉～室町時代

ＳＤ41　調査区南側に位置し、南北方向に流れる溝である。溝の規模は、幅1.7m以上、深さ1.18ｍ以上である。断面形状は、ややＶ字形である。Ａ地区にあるＳＤ40と同一のものとも考えられる。

b　時期不明

ＳＥ65　調査区北側に位置する素掘りの井戸とみられる。平面形はほぼ円形で、規模は直径1.1ｍ、深さ1.2ｍである。出土遺物はない。

ＳＡ66　調査区南側で南北方向に２間分検出した柵である。柱間は、2.8～3.0ｍ等間でしかないが、ＳＤ41に沿って並ぶことを考慮すると溝との関連性が考えられる。

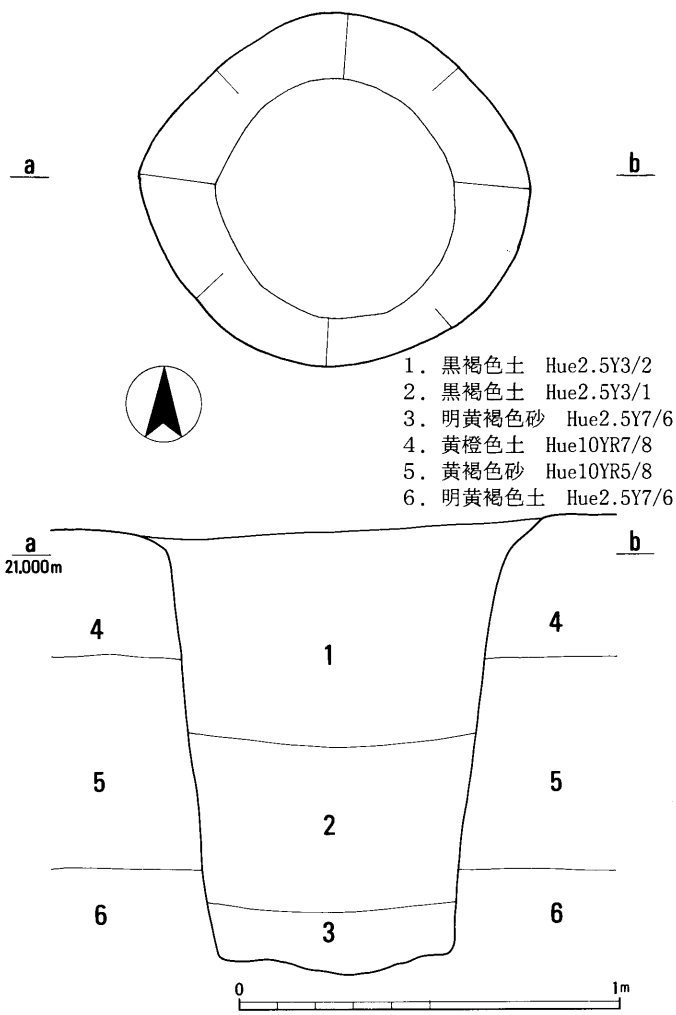


Fig. 6　ＳＥ65　平面・断面図（1／20）

Tab. 2　A・B地区遺構一覧表

遺構番号	小地区	種　類	時　期	備　　考
SD1	I4	溝	不　明	幅1.45m、深さ0.08m
SD2	E2他	溝	中　世	幅0.5m、深さ0.1m
SD3	E2他	溝	中　世	幅0.45m、深さ0.1m
SD4	I4他	攪　乱	現　代	幅0.8m、深さ0.1m
SD5	C2他	溝	不　明	幅0.8m、深さ0.1m
SD6	E2他	溝	不　明	幅0.8m、深さ0.1m
SD7	C1他	溝	中　世	幅0.9m以上、深さ0.3m
SD8	F2他	溝	中　世	幅0.45m、深さ0.1m
SD9	F2他	溝	中　世	幅0.45m、深さ0.2m
SD10	F3他	溝	中　世	幅0.45m、深さ0.2m
SK11	J5他	土　坑	不　明	長辺1.0m、短辺1.07m、深さ0.42m
SD12	I4他	溝	不　明	幅0.37m、深さ0.09m
SD13	I5他	溝	不　明	幅1.6m、深さ0.05m
P14	J4	ピット	不　明	径0.2m、深さ0.07m
P15	L7	ピット	不　明	径0.3m、深さ0.42m
SD16	E2他	溝	古墳以降	自然流路　SD17・SD18と合流
SD17	E2他	溝	古墳以降	自然流路　SD16・SD18と合流
SD18	E2他	溝	古墳以降	自然流路　SD16・SD17と合流
SK19	L9	土　坑	不　明	長辺1.03m、短辺0.9m、深さ0.1m
SK20	L9	土　坑	奈　良	長辺0.78m、短辺0.47m、深さ0.37m
P21	L9	ピット	奈　良	径0.5m、深さ0.31m
P22	L10	ピット	不　明	径0.24m、深さ0.07m
P23	M10	ピット	奈　良	径1.0m、深さ0.42m
P24	M10	ピット	不　明	径0.78m、深さ0.07m
P25	M9	ピット	中　世	径0.13m、深さ0.11m
P26	M11	ピット	奈　良	径0.65m、深さ0.25m
SK27	M11	土　坑	不　明	長辺0.7m、短辺0.48m、深さ0.1m
SD28	M11	溝	中　世	幅0.39m、深さ0.06m
P29	M12	ピット	不　明	径0.72m、深さ0.26m
P30	M12	ピット	不　明	径0.64m、深さ0.27m
SD31	M12	溝	奈　良	幅0.45m、深さ0.06m
P32	M12	ピット	奈　良	径0.55m、深さ0.34m
P33	M12	ピット	古　墳	径0.53m、深さ0.16m

遺構番号	小地区	種　類	時　期	備　　考
P34	M12	ピット	不　明	径0.3m、深さ0.06m
P35	M12	ピット	不　明	径0.23m、深さ0.23m
P36	M12	ピット	古　墳	径0.35m、深さ0.13m
P37	M13	ピット	奈　良	径0.2m、深さ0.44m
SK38	M13	土　坑	不　明	長辺1.27m、短辺0.45m、深さ0.09m
P39	M12	ピット	不　明	径0.6m、深さ0.33m
SD40	M13他	溝	中　世	最大幅1.5m、深さ1.1m
SD41	Q22	溝	中　世	幅1.77m以上、深さ1.18m以上
SK42	Q23	土　坑	平　安	長辺1.89m、短辺1.16m、深さ0.09m
P43	Q25	ピット	中　世	径0.27m、深さ0.12m
SK44	Q26	土　坑	古　墳	一辺1.73m、深さ0.49m
SK45	R25	土　坑	不　明	長辺2.25m以上、短辺0.92m、深さ0.42m
SK46	R26	土　坑	奈　良	長辺3.33m、短辺0.72m、深さ0.15m
SK47	S26	土　坑	中　世	長辺1.25m、短辺0.7m、深さ0.1m
SK48	S25	土　坑	不　明	長辺1.28m、短辺0.69m、深さ0.12m
SK49	R24	土　坑	中　世	長辺2.29m、短辺1.18m、深さ0.19m
P50	T26	ピット	奈　良	径0.65m、深さ0.13m
P51	T26	ピット	古　墳	径0.62m、深さ0.11m
SK52	X34	攪　乱	近　世	長辺2.9m、短辺2.14m、深さ0.21m
SK53	Y33	攪　乱	近　世	長辺3.15m、短辺1.57m、深さ0.15m
SD54	Z37	溝	中　世	幅3.6m以上、深さ0.9m以上
P55	X33	ピット	不　明	径0.65m、深さ0.13m
P56	W31	ピット	不　明	径0.33m、深さ0.2m
P57	V32	ピット	不　明	径0.48m、深さ0.35m
P58	W34	ピット	不　明	径0.23m、深さ0.15m
P59	X35	ピット	不　明	径0.86m、深さ0.33m
P60	X35	ピット	不　明	径0.36m、深さ0.26m
P61	X34	ピット	不　明	径0.24m、深さ0.13m
P62	X34	ピット	不　明	径0.43m、深さ0.27m
P63	X34	ピット	不　明	径0.64m、深さ0.29m
SD64	Y35	溝	不　明	幅0.23m、深さ0.2m
SE65	V31	井　戸	不　明	径1.1m、深さ1.21m
SA66	Q22	柵	不　明	柱間 2.8～3m

Ⅳ 遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナに整理して約60箱になる。遺物の種類は、石器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・金属製品・石製品・土錘である。時代は、旧石器時代から～江戸時代に及ぶが、大部分が古墳時代のものである。

ここでは、調査によって出土した遺物を時代順に分けて概略を記すが、個々の詳細は観察表を参照されたい。また、土錘については、個々の概略は述べず、土錘の観察表を参照されたい。

1　A地区

①弥生時代

1は、弥生土器の底部で、壺か甕であろう。

②古墳～奈良時代

a　ＳＤ16出土遺物

2・3は、須恵器蓋である。2は、宝珠つまみを持たない。天井部から緩やかに傾斜し、稜部おいて強く下方に屈曲し、口縁端部においてやや尖り気味にまとまる。2は、陶邑編年[①]の第2段階第4～5型式に並行するとみられる。

3は、宝珠つまみの中央部が上方に突出し、レンズ状を呈するものである。器形は、天井部から緩やかに外方に広がり傘状を呈する。内面に返りを持つ。都城編年の飛鳥Ⅳ～Ⅴ期[②]に相当するとみられる。

4は、土師器高杯である。脚部は短く接地面近くにおいて外方向に強く屈曲する。

b　ＳＤ17出土遺物

6は、楔形石器であろうか。上下・左右の四辺の1箇所に細かい剥離痕を残している。

7は、土師器杯である。全体的に丸くまとまる。体部外面に指頭圧痕が残る。

8は、土師器台付杯である。

9・10は、土師器皿である。9は、底部が水平で腰部が強く屈曲し、上方に向かって伸びる。口縁端部は、やや尖り気味にまとまる。

10は、底部から腰部、口縁部にかけて緩やかに屈曲している。口縁端部は、丸くまとまり内面に沈線が巡る。内面には、都城にみられる土器と同様暗文が放射状に施されている。都城編年の飛鳥Ⅲ期に相当するとみられる。

11は、土師器甕である。口縁端部は、外面に面を持ち、頸部は「く」の字状に屈曲して体部につながる。

12・13は、須恵器杯である。12は、宝珠つまみの中央部が平らである。器形は天井部から緩やかに開き、口縁部は欠損している。都城編年の平城Ⅱ～Ⅲ期に相当するとみられる。13は、天井部が欠損しており宝珠つまみが付くかどうかは不明である。都城編年の飛鳥Ⅳ～Ⅴ期であろう。

14は、須恵器杯である。底部から腰部にかけて水平に伸び、腰部でやや強く外方に開く。口縁端部は、やや丸くまとまる。高台は、断面形が方形を呈する。都城編年の飛鳥Ⅳ～Ⅴ期であろう。

15は、須恵器壺の体部から底部片とみられる。

16は、須恵器広口壺の口縁である。口縁端部は、上方と下方に肥厚する。

17は、須恵器の把手部分である。練鉢、鍋、壺のいずれかの把手部分とみられる。

18は、土師器甕である。口縁端部が面を持つように上方につまみあげられている。

19～21は、陶器椀（山茶椀）である。3点共高台は貼り付け後ナデられている。19は、尾張型第5型式、[③]20・21は、渥美型第5型式とみられる。

22・23は、土師器の把手で鍋か甑であろう。

c　ＳＤ18出土遺物

37は、Ｓ字状口縁台付甕の口縁部とみられ、元屋敷様式であろう。

38～41は、須恵器蓋である。38は、天井部が欠損しており、緩やかにに外方に開き最下段の稜部において強く下方に屈曲し、口縁端部はやや尖り気味にまとまる。陶邑編年の第Ⅱ型式第4段階とみられる。

39は、天井部から緩やかに傘状に外方に広がる。最下段の稜部においてやや強めに下方に屈曲し、口縁端部において丸くまとまる。陶邑編年の第Ⅱ型式第4段階とみられる。

40・41は、39とほぼ同様である。41は、天井部が

欠損している。陶邑編年の第Ⅱ型式第４段階とみられる。

42・43は、須恵器杯である。共に底部が欠損している。体部は、緩やかに上方に開き、受け部につながる。口縁端部は、共に内傾している。共に陶邑編年の第Ⅱ型式第４段階とみられる。

44は、天井部に宝珠つまみを持つ蓋である。宝珠つまみは、ほぼ水平である。体部は、緩やかに外方に開き、口縁端部において下方に尖り気味につまみだされている。都城編年の平城Ⅱ～Ⅲ期に相当するとみられる。

45・46は須恵器杯である。45は、口縁部のみである。46は高台を有し、腰部において外反し、口縁端部は丸くまとまる。器壁は、全体的に厚い。都城編年の平城Ⅱ～Ⅲ期に相当するとみられる。

47は、須恵器椀とみられる。器形的にみてやや変則的である。体部下部は丸く上方に伸び、体部上部はほぼ垂直に上方に伸びる。口縁端部は、やや丸く

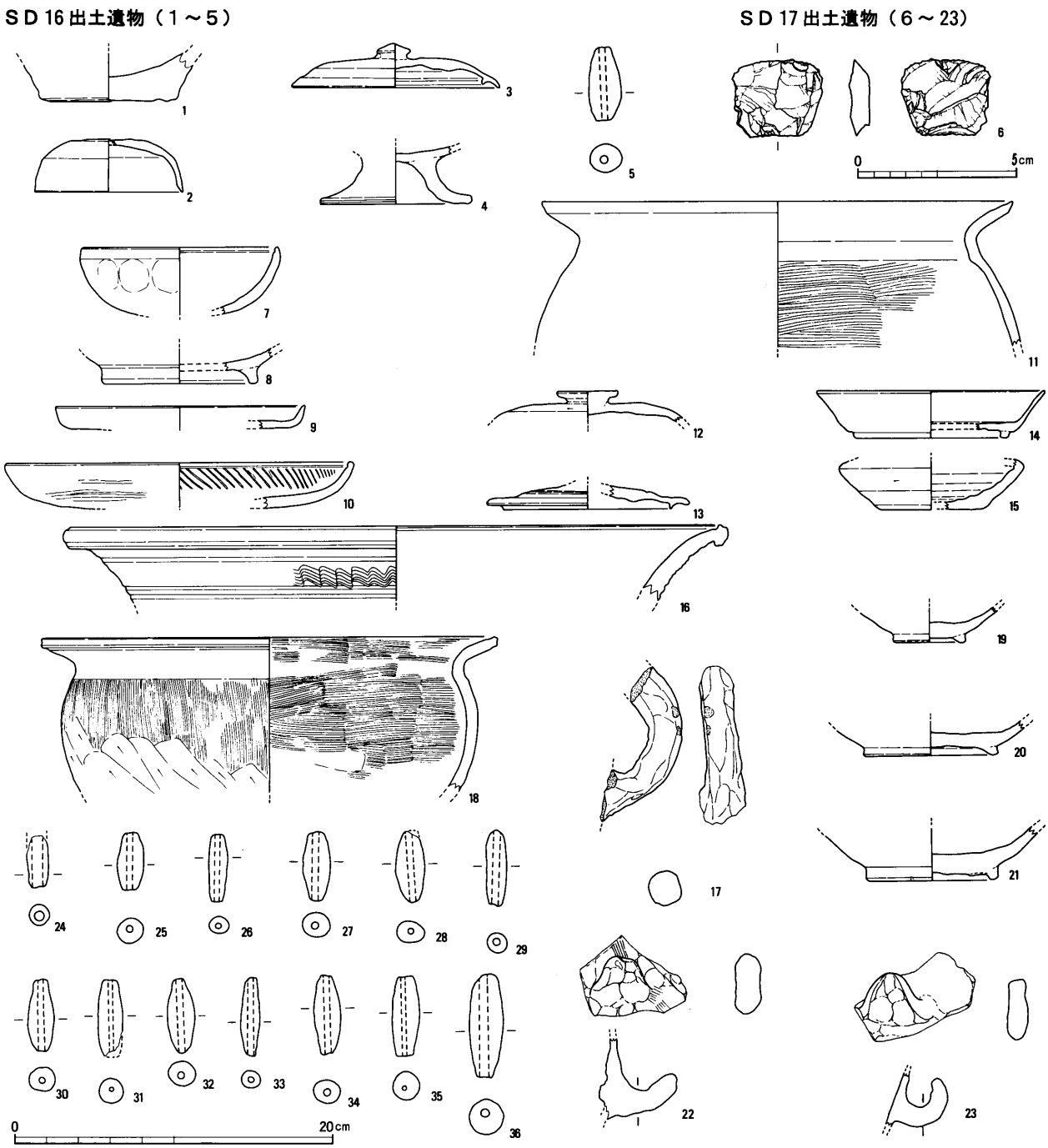


Fig. 7　出土遺物実測図（1／2・1／4）

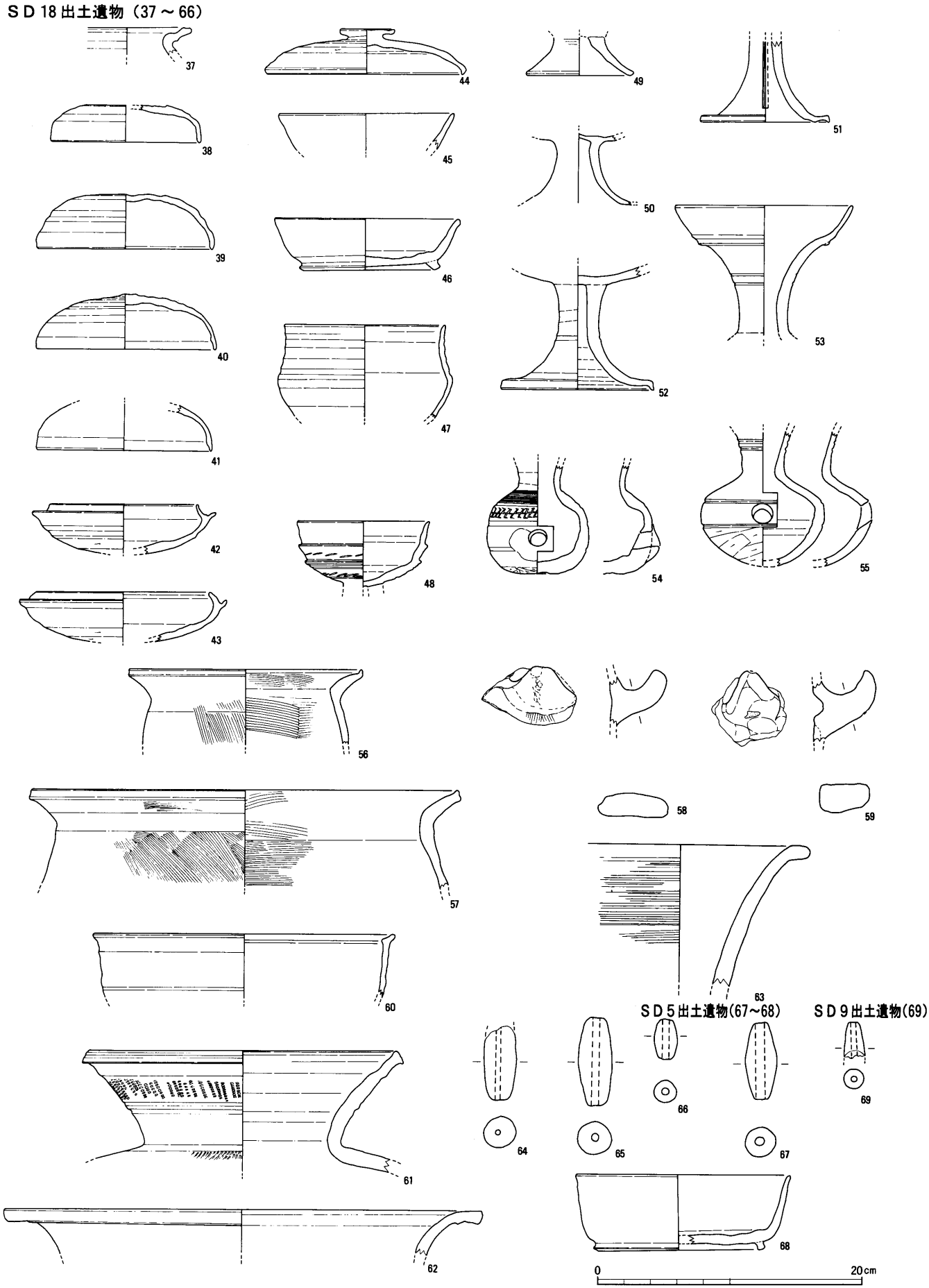


Fig. 8　出土遺物実測図（1／4）

まとまる。時期は、都城編年の平城Ⅱ～Ⅲ期に相当するとみられる。

48～52は須恵器高杯である。48は無蓋高杯で、杯部には、２段の稜を持ち、下から１段目の稜と脚部との接合部の間と下から１段目と２段目の稜の間には、刺突文が施されている。杯部は、脚部との接合部から緩やかに開き、下から１段目の稜部において上方にやや強く屈曲している。また、器壁は全体的に厚いが、下から２段目の稜部から口縁部にかけては、やや薄い。49は、透孔の下部のみ残る。50は脚部の中間部分が残る。51は、透孔が長方形を呈する高杯である。脚部は、「ハ」の字を描く様に緩やかに外方に開き、接地部分は、若干上下している。端部は、面を持つように調整されている。52は、透孔がない高杯である。脚部は、ほぼ真っ直ぐに垂下し、１条の沈線部分から外方に開く。接地部分は端部において下方につまみ出されたやや尖り気味にまとめられている。

53～55は、須恵器瑳である。53は、口頸部である。頸部には、２条の沈線が巡る。頸部は、「く」の字状に広がり１段の稜部からやや強く下方に屈曲する。口縁端部は、やや丸くまとめられている。器壁は、体部との接合部に向かうと厚みを増す。時期は、陶邑編年の第２型式第５段階とみられる。

54は、全体的に丸みを帯びた球形である。体部には、２条の沈線が巡る。沈線間には、円孔がある。上段の沈線と頸部にかけては、一見して雷状ないしＺ状のスタンプが施されている。施文の単位は４本ないし５本であろう。頸部から口縁部にかけては、欠損している。時期は、陶邑編年の第２型式第５段階であろうか。

この土器は、一般的に言われる新羅土器にみられる特徴を有している。三重県内においても初出で他にない器種である。

55は、ほぼ球形の体部に２条の沈線が巡る。２条の沈線間には円孔が穿たれている。頸部は、外方に強く屈曲し、２条の沈線が巡る。口縁部は、欠損している。時期は、陶邑編年の第２型式第５段階とみられる。

56は、土師器甕である。口縁部は、面を持つように端部をつまみ上げてまとめられている。頸部は、「く」の字状を呈し、器壁は厚い。

57は、土師器長胴甕である。口縁端部は、面を持つようにつまみ上げられ、頸部は「く」の字状を呈し

包含層出土遺物（90～97）

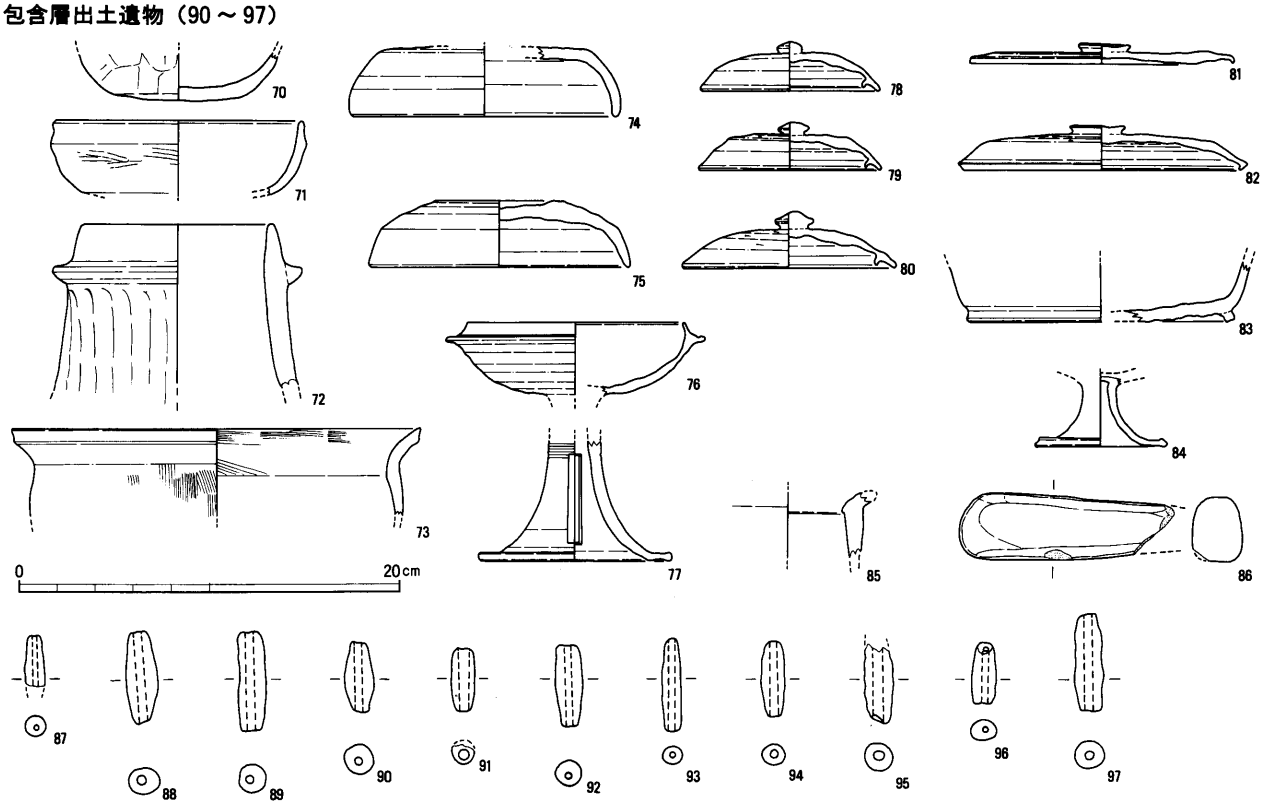


Fig. 9　出土遺物実測図（1／4）

器壁は厚い。

58・59は、土師器の把手部分で鍋か甑であろう。

60は、須恵器広口壺の口縁部である。口縁端部は、緩やかに外方に開いている。

61～63は、須恵器甕である。61は、口縁部から体部にかけてのものである。口縁端部は、斜上方・斜下方につまみだされている。頸部は、沈線が2条巡り、その上に刺突文が施されている。

62・63は、須恵器甕の口縁部であろう。

d　ＳＤ５出土遺物

68は、須恵器杯身である。腰部において強く屈曲し、上方に伸びる。高台部は、断面方形を呈している。都城編年の平城Ⅱ～Ⅲ期に相当するとみられる。

e　包含層出土遺物

70・71は、土師器杯である。70は、体部外面がヘラケズリによって調整されている。71は、体部から口縁部にかけてやや内彎している。口縁端部は、丸くまとまる。

72は、円筒形土器である。鍔部は、貼り付けられてナデによって調整している。

73は、土師器甕である。口縁端部は外面に面を持つようにつまみあげている。

74・75は、須恵器蓋である。天井部から緩やかに広がり最も下段においてやや強く屈曲し、口縁部においてやや尖り気味にまとまる。

75は、天井部が欠損している。天井部付近から口縁部にかけて強く屈曲して、口縁端部において丸くまとまる。共に陶邑編年の第2段階第4型式に並行するとみられる。

76・77は、須恵器高杯である。底部から受け部にかけて緩やかに開く。口縁部は、やや内傾する。77は、脚部が緩やかに外方に開き、接地面において垂直に外方に伸びる。脚部先端部は、丸くまとり透孔は長方形である。脚部に沈線が巡る。共に陶邑編年の第2段階第4～5型式に並行するとみられる。

78～82は、須恵器蓋である。78・79共に緩やかに広がり、最上段の稜から下方にやや強く屈曲する。78の宝珠つまみは、中央部が上方に突出し丸くまとまる。79の、宝珠つまみは、中央部が上方に突出しレンズ状を呈する。80は、宝珠つまみが中央部が上方に突出しレンズ状になる。体部は、緩やかに傘状に広がり、体部内面に短い返りを持つ。全て都城編年の飛鳥Ⅳ～Ⅴ期に相当するとみられる。81は、宝珠つまみから口縁部にかけて偏平な形を呈しており、宝珠つまみは、円盤状を呈している。82は、体部がほぼ垂直に外方に開き最上段の稜において下方に屈曲する。口縁端部は、下方内側に尖り気味にまとまる。81・82は、都城編年の平城Ⅱ～Ⅲ期に相当するとみられる。

83は、須恵器杯である。高台部から強く屈曲し、上方に向けて開く。都城編年の平城Ⅱ～Ⅲ期に相当するとみられる。

84は、須恵器高杯である。杯部は、欠損している。脚部は、緩やかに外方に開き、端部において上方につまみ上げられ、外方に尖り気味にまとめられている。都城編年の平城Ⅱ～Ⅲ期であろう。

85は、須恵器壺頸部であろうか。

86は、砥石である。4面全面において砥面が認められる。一部欠損している。

③平安時代

a ＳＫ42出土遺物

98は、縄文土器の深鉢体部と考えられる。馬見塚

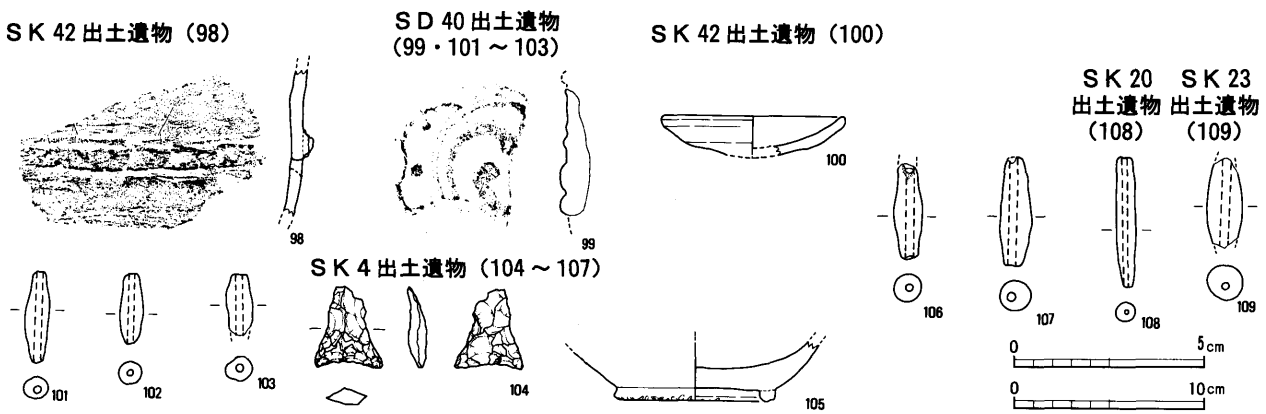


Fig. 10　出土遺物実測図（1／2・1／4）

包含層出土遺物（110～135）

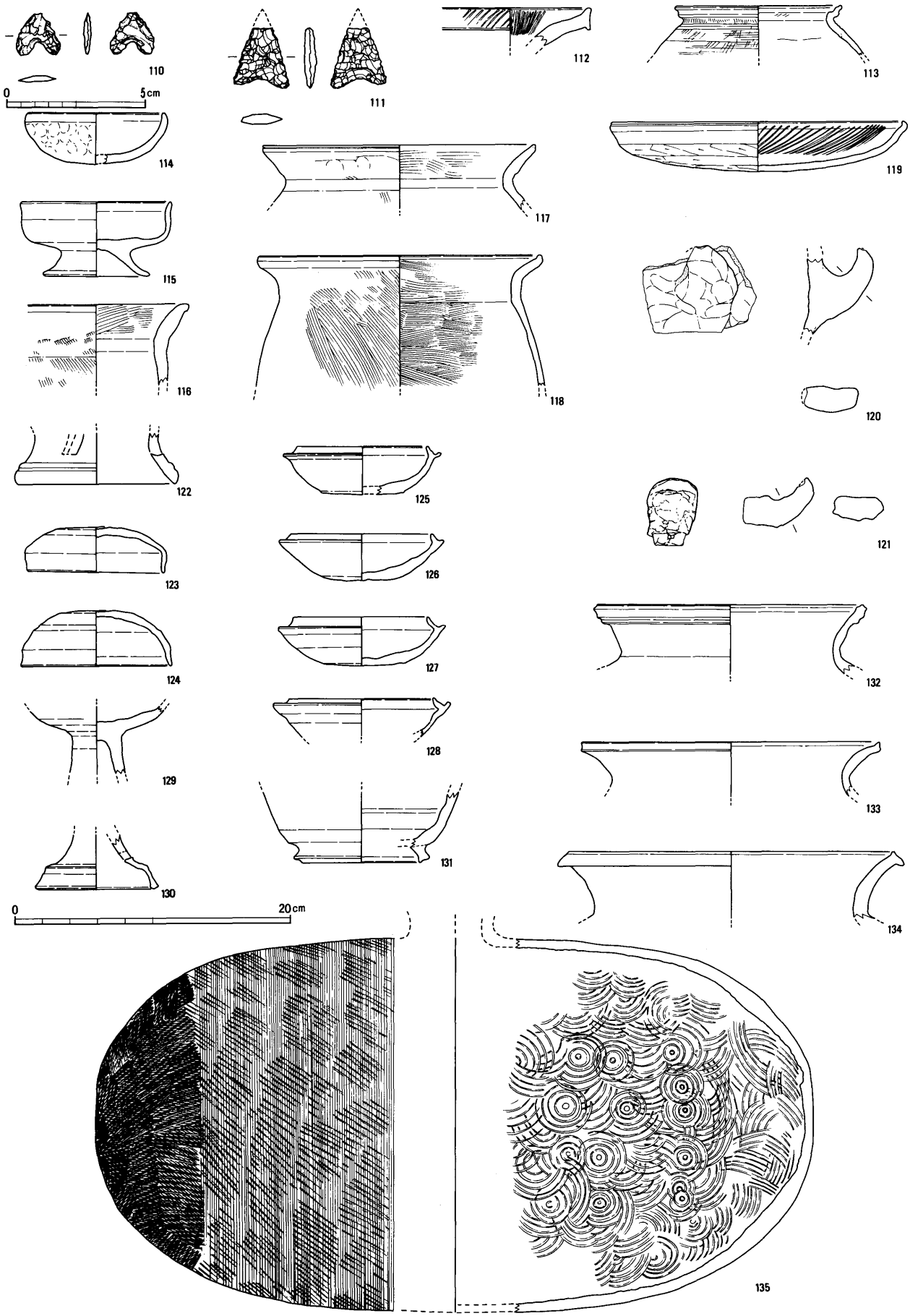


Fig. 11　出土遺物実測図（1／2・1／4）

式とみられる。

④中世

ａＳＤ40出土遺物

99は、軒丸瓦の瓦当部分で大きく欠損している。内区は、巴文の頭部がある程度大きく、尾部がやや長い。外区は、珠文がある程度密である。鎌倉時代のものとみられる。

ｂ　包含層

100は、土師器皿である。底部は欠損しているものの緩やかに口縁部にかけて広がる。口縁端部は、丸くまとまる。11世紀代のものとみられる。

⑤カクラン出土遺物

ａＳＫ４

104は、石鏃である。全体形は、二等辺三角形状を呈し、脚端部がやや尖鋭なものである。

105は、陶器椀（山茶椀）である。尾張型第５型式とみられる。

２　Ｂ地区

①縄文時代

110・111は石鏃である。全体形が正三角形状に近く脚端部が丸みを持ち、あまり尖鋭でない。111は、全体形が二等辺三角形状を呈し、脚端部がやや尖鋭なものである。

②弥生時代

112は、広口壺の口縁部である。端部は、上方と下方に引き出され、面を持っている。端面には刺突文が施される。

113は、Ｓ字状口縁台付甕の口縁部から体部上半部である。欠山様式新段階とみられる。

③古墳～奈良時代

114は、土師器杯である。底部の一部は、欠損している。底部から緩やかに広がり口縁部においてやや内傾する。口縁端部は、やや丸くまとまる。

115は、土師器低脚の高杯である。脚部は杯部から緩やかに広がり、接地面は丸くまとまる。杯部は、ほぼ垂直に屈曲して上方に向かう。口縁端部は、やや外彎し、丸くまとまる。

116～118は、土師器甕である。116は、口縁部とみられる。117は、口縁端部が面を持つようにつまみ上げられている。頸部は、「く」の字状である。

118は、土師器甕である。口縁端部は、やや上方につまみ上げてられている。頸部から体部は、緩やかに「く」の字を描いている。

119は、土師器皿である。底部から外方に丸みを帯びながら広がり、腰部において上方に屈曲し、口縁端部は、内側に折り込まれ様に丸くまとめている。内面には、丁寧に放射状暗文が施され沈線が口縁部内面に巡る。都城編年の飛鳥Ⅳ～Ⅴ期に相当するとみられる。

120・121は、土師器の把手部分である。把手接着後全面をナデによって調整されている。鍋か甑であろう。

122は、須恵器高杯の脚部である。接地面は、やや尖り気味にまとめている。陶邑編年の第１型式第５段階であろうか。

123・124は、須恵器蓋である。123は、天井部から緩やかに広がり、強く屈曲して内彎する。口縁端部は、やや尖り気味にまとまる。124は、天井部から緩やかに開き、最下段の稜部において内彎する。口縁端部は、やや尖り気味にまとまる。

125～128は、須恵器杯である。125は、底部からやや急に立ち上がり、口縁端部はやや外方に広がる。受け部はやや内傾する。126は、底部からやや水平に広がり、稜においてやや屈曲する。受部のたちあがりが短く丸くまとめている。127は、底部から緩やかに広がり、受け部は外方に伸びる。立ち上がりは、やや内側を向いた後に外反する。口縁端部は、やや尖り気味にまとまる。128は、底部が欠損している。受け部は、丸くまとまる。陶邑編年の第２型式第５～６段階とみられる。

129・130は、須恵器高杯である。杯部の上半部と脚部の下半部は、欠損している。130は脚部から緩やかに広がり、最上段の稜において強く屈曲する。接地面は、やや広がり気味に厚い。

131は、須恵器長頸壺の底部である。

132～134は、須恵器の甕の口縁部から頸部にかけてのものである。132は、口縁端部が外上方に面を持つように厚さを増し、２段にわたって稜を持つ。133は、口縁端部がやや上方につまみだされ、端部外面に面を持たせている。頸部にかけては、緩やかに屈曲し「く」の字状である。134は、口縁端部が斜外方

と内面上方につまみあげられている。

135は、横瓶である。口縁部から頸部にかけては、欠損している。体部内面は青海波文、外面は、タタキ後すり消している。

④近世

178は、煙管の雁首である。一部欠損しているものの脂返しは、残る。

⑤近世以降

179は、砥石である。砥面は2面に渡っている。

180～182・185は、陶器の椀である。183は、陶器の輪花大皿ないし大鉢である。184は、擂鉢である。186は炮烙である。時期は、19世紀代のものである。187・188は、砥石である。187は4面、188は3面にわたって砥面がある。

〔註〕

①須恵器に関しては、以下の文献を参考とした。中村浩ほか「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告第30輯』1978年

②古代の土器研究会編「7世紀の土器 古代の土器5-1（近畿東部・東海編）」1997年

③山茶椀に関しては、以下の文献を参考とした。藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』1991年

包含層出土遺物（136～190）

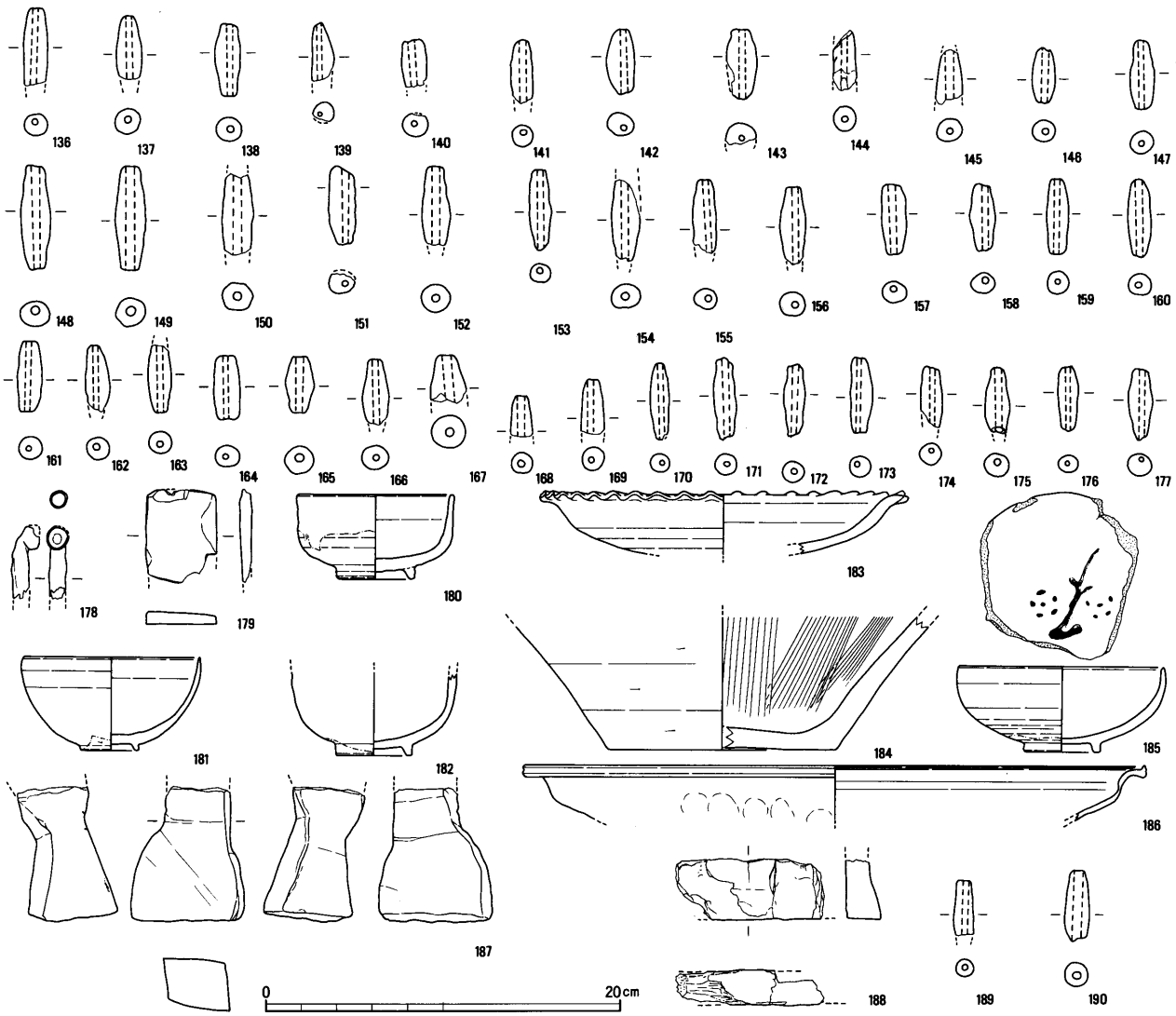


Fig. 12　出土遺物実測図（1／4）

Tab. 3　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値(cm) 口径	計測値(cm) 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	003-02	弥生土器　壺？	G3区 包含層	底径 7.2	残高 3.0	内外面ナデ	粗(1～3mmの小石含む)	並	にぶい黄橙色 10YR7/2	——	
2	018-05	須恵器　蓋	SD16	9.2	3.4	体部内外面ロクロナデ、天井部ヘラ切り後ナデ	やや密	並	灰色 5Y6/1	約30%	
3	018-03	須恵器　蓋	SD16	13.2	2.8	体部内外面ロクロナデ、天井部ナデ	やや密(2mm前後の小石含む)	並	灰白色　オリーブ灰色 5Y7/1　10Y5/2	約30%	
4	013-05	須恵器　高杯	SD16	脚径 9.6	残高 4.6	内外面ナデ	やや粗(2.5mm以下の小石含む)	並	外　浅黄橙色 10YR8/3 灰白色　10YR8/2 内　にぶい黄橙色 10YR7/2	脚部約50%	部分的に焼成不十分
7	026-05	土師器　杯	SD17	12.3	残高 4.3	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ナデ、外面風化著しい	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	約30%	
8	026-09	土師器　台付杯	SD17	高台径 9.6	残高 2.3	底部貼り付け後ナデ	やや密(2mm以下の小石含む)	良	橙色 5YR7/8	高台部約30%	
9	026-06	土師器　皿	SD17	15.8	残高 1.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ	密	良	橙色 5YR6/8	——	
10	025-02	土師器　皿	SD17	22.0	残高 2.9	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、体部外面ケズリ、内面暗文	密	良	橙色 5YR6/6	——	
11	025-01	土師器　甕	SD17	推定 30.0	残高 9.2	体部外面風化著しい、口縁部内外面ヨコナデ、内面ヨコハケ	粗(3.5mm以下の小石含む)	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	約20%	長胴甕？
12	026-03	須恵器　蓋	SD17		残高 2.1	内面ロクロナデ、外面体部ロクロケズリ、つまみ貼り付け後ナデ	やや密(1mm以下の小石含む)	良	赤灰色 2.5YR5/1	約20%	焼成不十分
13	026-04	須恵器　蓋	SD17	10.7	残高 1.5	内外面ロクロナデ	密(1mm以下の小石含む)	良	明紫灰色 5P7/1	口縁部約20%	焼成不十分
14	026-07	須恵器　杯	SD17	14.6 底径 9.6	3.0	内外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ	密	不良	淡黄色 2.5Y8/4	約20%	焼成不十分
15	026-08	須恵器　壺？	SD17	底径 6.2	残高 3.2	内面ロクロナデ、外面体部ロクロケズリ、底部板圧痕跡残る	密(5mm以下の小石含む)	良	灰白色 7.5Y6/1	——	平瓶の可能性もある
16	016-01	須恵器　広口壺	SD17	推定 41.4	残高 4.8	内外面ロクロナデ	密	良	灰白色　灰色 N7/0　N5/0	——	頸部に波状文1条巡る
17	027-03	須恵器　練鉢？	SD17	——	——		密	良	灰白色 N7/0	——	練り鉢の把手もしくは、壺の把手、盤の把手の可能性がある
18	019-01	土師器　甕	SD17	推定 28.4	残高 9.7	体部内外面ハケ、口縁部ナデ	やや密(3mm以下の小石含む)	並	灰白色 10YR8/2	約30%	
19	016-05	陶器椀（山茶椀）	SD17	高台径 4.4	残高 2.3	内外面ロクロナデ、貼り付け高台、底部モミガラ痕	粗(2mm前後の小石含む)	並	灰白色 N8/0	底部完存	内面自然釉付着
20	026-02	陶器椀（山茶椀）	SD17	高台径 8.0	残高 2.1	内外面ロクロナデ、貼り付け高台、底部モミガラ痕	粗(1mm以下の小石含む)	良	灰白色 N8/0	底部約50%	内面自然釉付着
21	013-04	陶器椀（山茶椀）	SD17	底径 8.4	残高 3.3	内面ロクロナデ、外面体部ロクロナデ、貼り付け高台高台部に籾殻痕	やや密（微砂含む）	並	灰白色 5Y8/1	約20%	
22	027-01	土師器	SD17	——	——	全面ナデ	やや粗(3mm以下の小石含む)	良	にぶい黄橙色 10YR7/3	——	把手部分
23	027-02	土師器	SD17	——	——	全面ナデ	密	良	浅黄色 2.5Y8/3	——	把手部分
37	022-07	土師器　S字甕	SD18	——	残高 2.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部ハケ？	粗(2mm以下の小石含む)	並	淡黄色　2.5Y8/3	——	
38	017-08	須恵器　蓋	SD18	11.1	2.8	外面天井部ヘラ切り、外面体部～内面ロクロナデ	やや密	良	灰白色　灰色 N7/0　N6/0	約30%	

Tab. 4　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値(cm) 口径	計測値(cm) 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
39	017-03	須恵器　蓋	SD18	13.2	4.1	外面天井部ヘラ切り、外面体部～内面ロクロナデ	やや密	並	灰白色 N8/0	約50%	
40	013-03	須恵器　蓋	SD18	13.6	4.2	外面天井部ヘラ切り、外面体部～内面ロクロナデ	やや密	並	灰白色 N8/0	約30%	
41	017-07	須恵器　蓋	SD18	13.2	残高 3.9	外面体部～内面ロクロナデ	やや密	良	灰白色 N8/0	約20%	
42	017-05	須恵器　杯	SD18	11.2	3.8	外面底部ロクロケズリ、口縁部～内面ロクロナデ	やや粗(2mm前後の小石含む)	並	青灰色 5B6/1	約30%	
43	017-04	須恵器　杯	SD18	13.0	3.8	外面底部ロクロケズリ、口縁部～内面ロクロナデ	やや粗(2mm以下の小石含む)	並	灰白色　灰色 N7/0　N5/0	約30%	
44	017-02	須恵器　蓋	SD18	14.7	3.4	外面天井部ヘラ切り、外面体部～内面ロクロナデ、つまみ貼り付け後ナデ	やや粗(2mm以下の小石含む)	良	灰白色 N5/0	約40%	
45	017-06	須恵器　杯	SD18	13.2	3.85	口縁部～内面ロクロナデ	やや粗(2mm以下の小石含む)	並	灰白色 N7/0　N5/0	口縁部約30%	
46	018-01	須恵器　杯	SD18	14.0	3.95	外面底部ナデ、口縁部～内面ロクロナデ	やや密(5mm以下の小石含む)	並	灰白色 5Y8/1	約80%	
47	023-04	須恵器　椀？	SD18	12.1	残高 7.0	内外面ロクロナデ	やや密(1.5mm以下の小石含む)	良	灰白色 N7/0	約30%	
48	015-04	土師器　高杯	SD18	脚部径 8.1	残高 2.9	磨滅著しく調整不明	やや密	並	橙色 5YR7/8	——	
49	022-06	須恵器　高杯	SD18	9.9	残高 4.9	内外面ロクロナデ	密	良	灰白色　灰色 N8/0　N4/0	約30%	杯部に2段の稜を持たせ、刺突文を2条巡らせている
50	016-06	須恵器　高杯	SD18	——	残高 5.3	内外面ロクロナデ	やや密	並	灰白色 N8/0	——	
51	016-04	須恵器　高杯	SD18	脚部径 9.8	残高 6.1	内外面ロクロナデ	やや密(2mm以下の小石含む)	良	灰白色　暗灰色 N8/0　N3/0	脚部約30%	
52	023-02	須恵器　高杯	SD18	脚部径 11.6	残高 9.3	外面ロクロナデ、杯部内面ナデ、脚部内面ナデ	やや密(1.5mm前後の砂粒含む)	良	灰白色　灰色 N7/0　N6/0	脚部約30%	
53	016-03	須恵器　甕	SD18	13.3	残高 9.7	内外面ロクロナデ	やや密	良	灰白色　灰色 N8/0　N5/0	口縁部約30%	脚部に2条の沈線、稜線1条が巡る
54	011-07	須恵器　甕	SD18	——	——	内外面ロクロナデ	密（微砂含む）	良	明青灰色　灰白色 5B7/1　N7/0	——	
55	006-01	須恵器　甕	SD18	——	残高 9.8	内外面ロクロナデ	密	並	灰白色　灰色 7.5YR7/1　5Y5/1	約80%	頸部に2条の沈線、体部孔の上下に2条の沈線
56	015-02	土師器　甕	SD18	推定 17.6	残高 5.6	口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケ	やや粗(2mm以下の小石含む)	並	淡赤橙色　2.5YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/2	口縁部約20%	
57	015-01	土師器　長胴甕	SD18	推定 32.3	残高 7.5	口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケ	やや粗(4mm以下の小石含む)	並	浅黄橙色　7.5YR8/3	口縁部約20%	
58	015-03	土師器	SD18	——	——		やや密(2mm以下の小石含む)	並	褐灰色　7.5YR5/1 灰褐色　5YR5/2 暗灰色　N3/0	——	把手部分
59	024-02	土師器	SD18	——	——		粗(4mm以下の小石含む)	並	淡黄色　2.5Y8/3 にぶい橙色　10YR7/3 にぶい橙色　10YR6/3	——	把手部分
60	015-05	須恵器　甕	SD18	推定 22.7	残高 4.7	内外面ロクロナデ	密	良	灰白色 N8/0	——	
61	015-05	須恵器　甕	SD18	推定 23.4	残高 9.2	内外面ロクロナデ、口縁部に刺突文、体部タタキ	やや粗(2mm以下の砂粒含む)	良	灰色 N6/0　N5/0	口縁部約30%	
62	016-02	須恵器　甕	SD18	推定 35.8	残高 4.7	内外面ロクロナデ	密	良	灰色 N6/0	口縁部約30%	
63	017-01	須恵器　壺？	SD18	——	残高 7.8	内外面ロクロナデ	密	良	灰白色　灰色 5Y8/1　N6/0	口縁部約20%	
68	018-02	須恵器　杯	SD5	16.4 底径 9.9	5.9	体部内外面ロクロナデ、高台貼り付け後ナデ	やや密(2mm前後の小石含む)	並	明灰オリーブ色 2.5GY7/1	約90%	

Tab. 5　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値(cm) 口径	計測値(cm) 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
70	025-04	土師器　杯	E 3区 包含層	——	残高 2.5	底部外面ナデ、体部外面ケズリ、内面磨耗著しい	やや粗 2 mm以下の小石含む)	良	外　にぶい黄褐色 5YR5/4 内　にぶい黄橙色 10YR7/3	約20%	
71	010-02	土師器　杯	L 8区 包含層	(推) 13.0	残高 3.9	内面ナデ、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ミガキ、底部外面ケズリ	密 (微砂含む)	良	橙色 5YR7/6	——	
72	003-01	円筒土器	F 2区 包含層	10	残高 8.6	口縁部外面ユビオサエ、体部外面～内面ナデ	やや粗(1～2 mmの小石含む)	並	にぶい橙色 5YR7/4	——	甕の上部か？
73	010-01	土師器　甕	L 8区 包含層	(推) 21.6	残高 4.6	口縁部内面ハケ、体部内面ナデ、体部外面ハケ	やや粗(1mm前後の小石含む)	良	内　橙色　7.5YR7/6 外　橙色　5YR6/6	——	
74	026-01	須恵器　蓋	D 2区 包含層	13.7	3.5	口縁部内外面ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ後ナデ、天井部内面ナデ	密	良	灰白色 N8/0	約20%	
75	023-03	須恵器　蓋	C 2区 包含層	14	残高 3.7	口縁部内外面ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、天井部内面ナデ	やや密(1mm前後の小石含む)	良	灰白色　灰色 N7/0　N6/0	約20%	
76	013-02	須恵器　高杯	E 2区 包含層	11.5	残高 3.8	杯部内面口縁部から体部ロクロナデ、外面底部ロクロケズリ	やや密(1mm前後の小石含む)	並	灰白色 N8/0	杯部 約40%	
77	011-06	須恵器　高杯	L 7区 包含層	脚径 10	残高 6.3	脚部内外面ロクロナデ	密 (微砂含む)	良	内　灰色　7.5Y5/1 外　灰白色 7.5Y7/1	脚部 約40%	
78	011-04	須恵器　蓋	K 7区 包含層	9.4	2.6	体部外面上半ロクロケズリ内外面ロクロナデ	ほぼ密(3mm前後の小石含む)	良	灰白色 N6/0	約30%	
79	011-01	須恵器　蓋	K 7区 包含層	9.6	2.55	体部外面上半ロクロケズリ内外面ロクロナデ	密 (微砂含む)	良	灰白色 N7/0	約40%	
80	011-02	須恵器　蓋	K 6区 包含層	11.2	3	体部外面上半ロクロケズリ内外面ロクロナデ	ほぼ密(1mm前後の小石含む)	良	内　灰白色 N7/0 外　灰白色 2.5Y7/1	約80%	
81	011-03	須恵器　蓋	L 8区 包含層	14	1.05	体部外面上半ロクロケズリ内外面ロクロナデ	密	良	内　灰白色 N7/0 外　灰白色 10Y6/1	約30%	
82	011-05	須恵器　蓋	L 7区 包含層	14.8	2.3	体部外面上半ロクロケズリ内外面ロクロナデ	密 (微砂含む)	良		ほぼ完形	
83	003-04	須恵器　杯	F 3区 包含層	底径 14.4	残高 3.2	内外面ロクロナデ	やや粗(1～4 mmの小石含む)	良	灰白色 N7/0	——	
84	003-05	須恵器　高杯	F 3区 包含層	脚径 6.6	残高 3.65	脚部内外面ロクロナデ	やや粗(1mm前後の小石含む)	良	灰白色 N7/0	脚部 約20%	
85	003-03	須恵器　壺？	G 3区 包含層	——	残高 3.5	内外面ナデ	やや粗(1～2 mmの小石含む)	並	褐灰色 7.5YR4/1	——	
98	013-08	縄文土器	SK42	——	残高 7.7	内面ナデ、外面突帯下ケズリ、突帯上ナデ	粗(2.5mm前後の小石含む)	並	内　灰白色　10YR8/2 外　灰褐色　7.5YR5/2	——	馬見塚式
99	006-02	軒丸瓦	SD40	——	——		密	並	灰白色 10YR8/2		
100	010-04	土師器　皿	K 7区 包含層	9.6	2.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ナデ	やや密(2mm前後の小石含む)	良	淡橙色　5YR6/8 にぶい黄橙色 10YR7/2 灰黄褐色　10YR6/2	約30%	
105	013-01	陶器椀 (山茶椀)	SK 4	底径 8.5	残高 3.1	内外面ロクロナデ、貼る付け高台、底部糸切り	やや密(3mm前後の微砂含む)	良	灰白色 2.5Y8/1	約30%	内面自然釉付着
112	018-07	弥生土器　壺	R23区 包含層	——	残高 2.6	口縁部内面ミガキ、口縁端部ナデ・キザミ、口縁部外面ナデ	やや密(2mm前後の小石含む)	並	灰白色 2.5Y8/2	——	
113	022-05	土師器　S字甕	S25区 包含層	12.2	残高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ	粗(2mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙色　10YR8/3 灰白色　———	口縁部 約20%	
114	022-04	土師器　杯	Q23区 包含層	9.9	3.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ナデ、体部外面ユビオサエ、底部外面ナデ	やや粗(1.5mm以下の砂粒含む)	並	淡黄橙色　10YR8/3 灰黄色　2.5Y7/2	約30%	
115	022-02	須恵器　高杯	S26区 包含層	10.9 底径 7.8	5.4	風化著しく調整不明	やや密(1.5mm以下の砂粒含む)	不良	灰白色 2.5Y8/1	約80%	

Tab. 6　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値(cm) 口径	計測値(cm) 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
116	024-04	土師器　甕	S25区 包含層	——	残高 6.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ	やや粗(2mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙色 7.5YR8/4	——	
117	021-06	土師器　甕	S26区 包含層	20.0	残高 4.7	口縁端部ヨコナデ、口縁部内面ハケ、体部外面ハケ、体部内面ナデ	やや粗 (微砂含む)	並	橙色 7.5YR7/6	口縁部 約20%	
118	007-04	土師器　甕	S27区 包含層	(推) 20.9	残高 9.6	口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケ	やや粗(3mm以下の小石含む)	並	にぶい橙色 7.5YR7/3	口縁部 約40%	
119	022-01	土師器　皿	T26区 包含層	21.5	3.6	口縁部ヨコナデ、内面ナデ後暗文、体部外面ナデ、ケズリ	やや密(2mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙色 7.5YR8/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	約50%	
120	024-01	土師器	Q23区 包含層	——	——		粗(5mm以下の小石含む)	並	淡黄色 2.5Y8/3 明褐灰色 7.5YR7/2 褐灰色 7.5YR5/1	——	把手部分
121	024-01	土師器	S26区 包含層	——	——		密	良	灰白色 N8/0	——	把手部分
122	021-05	須恵器　高杯	Q23区 包含層	脚部径 12.0	3.7	内外面ロクロナデ	やや密	やや不良	外　灰白色 5Y7/1 内　灰色 5Y6/1	——	長方形の透孔あり
123	018-04	須恵器　蓋	S26区 包含層	10.0	3.2	内外面ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	やや密(2mm以下の小石含む)	並	灰白色 2.5YR8/1	約40%	
124	007-03	須恵器　蓋	R22区 包含層	10.9	4.1	内外面ロクロナデ、天井部未調整	やや密(1mm前後の小石含む)	並	灰黄色 2.5Y6/2	約20%	
125	007-01	須恵器　杯	T27区 包含層	9.6	3.5	内外面ロクロナデ、底部未調整	やや粗(2mm以下の小石含む)	並	灰白色 2.5GY6/1	約50%	
126	021-03	須恵器　杯	Q23区 包含層	10.4	3.4	内外面ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	やや密	不良	灰白色　2.5Y8/1	約40%	
127	021-02	須恵器　杯	R23区 包含層	10.0	3.6	内外面ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	やや密(1mm以下の小石含む)	並	灰白色　N8/0 灰白色　N7/0	約60%	
128	021-07	須恵器　杯	S26区 包含層	10.6	残高 2.7	内外面ロクロナデ	やや密	並	灰色 N7/0	約30%	
129	022-03	須恵器　高杯	S26区 包含層	——	残高 4.8	内外面ロクロナデ	やや粗(1.5mm以下の砂粒含む)	不良	灰白色 5Y7/1	約20%	
130	018-06	須恵器　高杯	R23区 包含層	脚部径 8.4	残高 4.0	内外面ロクロナデ	やや密	並	灰白色　N7/0	脚部約 30%	透孔有り
131	007-02	須恵器　長頸壺	T27区 包含層	高台径 8.6	残高 5.2	内外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ	やや密(3mm以下の小石含む)	並	灰白色 5Y7/1	底部約 30%	
132	021-04	須恵器　甕	S26区 包含層	20.0	残高 5.1	口縁部ロクロナデ、体部タタキ	密	良	外　灰色　N5/0 内　灰白色　N8/0 N7/0	口縁部 約20%	
133	018-08	須恵器　壺	R23区 包含層	23.8	残高 3.9	内外面ロクロナデ?	やや粗(1mm以下の小石含む)	並	灰白色 2.5Y8/2	口縁部 約20%	
134	021-01	須恵器　壺	Q23区 包含層	24.0	4.7	内外面ロクロナデ	やや密	良	外　灰色　N5/0 内　灰白色　N7/0	——	
135	020-01 020-02	須恵器　横瓶	Q25区 包含層	——	27.4	内面同心円文、外面タタキ後スリ消し	やや密	良	灰色 N8/0	——	
180	025-05	陶器　椀	カクラン	8.7 底径 4.4	4.8	内外面ロクロナデ、削り出し高台	密	良	灰白色　2.5Y8/1 (灰釉) 暗オリーブ色 7.5Y4/3 (灰釉) にぶい褐色　7.5YR5/4	約40%	内外面に施釉
181	025-06	陶器　椀	カクラン	10.0 底径 4.2	5.25	内外面ロクロナデ、削り出し高台	密	良	灰白色　7.5Y7/1 (灰釉) 明青灰色　5BG7/1	約40%	内外面に施釉
182	010-05	陶器　椀	カクラン	底径 4.2	残高 4.7	内外面ロクロナデ、削り出し高台	やや粗(3mm前後の小石含む)	良	灰白色　2.5Y8/2 (釉) 暗赤褐色　5YR3/4	約30%	内外面に施釉
183	025-03	陶器　皿	カクラン	21.0	3.6	内外面ロクロナデ、口縁部ユビによる指圧	密	良	灰白色　2.5Y8/1 (釉) 灰白色　10Y7/2	約30%	内外面に施釉 大鉢の可能性もある

Tab. 7　出土遺物観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値(cm) 口径	計測値(cm) 器高	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
184	028-01	陶器　擂鉢	カクラン	底径 12.6	残高 6.9	体部外面ロクロケズリ、底部糸切り痕跡	やや粗(4mm以下の小石含む)	良	灰白色　2.5Y8/2 (釉) 褐色　7.5YR4/3	約30%	内面14本のスリ目あり
185	012-01	陶器　椀	カクラン	底径 4.2	4.8	内外面ロクロナデ、削り出し高台	密(微砂含む)	良	灰白色　7.5Y8/1 (釉) 灰白色　5Y8/2	約30%	内外面に施釉
186	010-03	土師器　鍋	カクラン	(推) 35.4	残高 3.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ	密(微砂含む)	良	橙色 5YR6/8	——	体部外面スス付着

Tab. 8　出土石器観察表

報告書番号	登録番号	名称	出土位置 遺構	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
6	S1-1	楔形石器	SD17	サヌカイト	2.42	2.79	0.65	5.3	
104	S2-1	石鏃	SK4	サヌカイト	2.21	1.74	0.5	1.2	
110	S3-1	石鏃	Q23区 包含層	サヌカイト	1.5	1.55	0.25	0.5	
111	S3-2	石鏃	S26区 包含層	サヌカイト	2.2	1.95	0.4	1.6	

Tab. 9　出土石製品観察表

報告書番号	登録番号	名称	出土位置 遺構	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
86	024-03	砥石	C2区 包含層	11.2	3.6	2.6	砥面は四面
179	013-06	砥石	S26区 包含層	5.2	4.0	0.7	砥面は二面
187	028-03	砥石	カクラン	7.7	6.4	2.9	砥面は四面
188	028-02	砥石	カクラン	8.4	3.4	2.0	砥面は三面

Tab. 10　出土金属製品観察表

報告書番号	登録番号	名称	出土位置 遺構	長(cm)	火皿径(cm)	接合部径(cm)	備考
178	006-03	雁首	Q23区 包含層	4.1	1.3	0.9	

Tab. 11　出土土錘観察表

報告書番号	登録番号	出土位置 遺構	長(cm)	直径(cm)	幅(cm)	重さ(g)	胎土	焼成	色調	備考
5	005-04	SD16	4.65	0.4	2.05	14.16	やや密	並	浅黄橙色 10YR8/4　浅黄橙色 10YR8/4	
24	004-08	SD17	3.2	0.65～0.7	1.35	4.03	やや密	並	褐灰色 10YR6/1　灰黄色 2.5Y7/2	
25	004-03	SD17	3.6	0.35	1.7	8.54	やや密	並	にぶい橙色 7.5YR7/4	
26	004-05	SD17	4.2	0.3	1.2	6.09	やや密	並	灰白色 2.5Y8/2　褐灰色 7.5Y6/1	
27	004-10	SD17	4.4	0.3	1.8	9.91	やや密	並	灰白色 2.5Y8/2	
28	004-04	SD17	4.5	0.4	1.8	8.99	やや密	並	浅黄橙色 10YR8/3	
29	019-04	SD17	4.8	0.4	1.2	7.45	やや密(3mm以下の小石含む)	並	灰黄褐色 10YR6/2	
30	004-06	SD17	4.55	0.3	1.65	10.16	やや密	並	にぶい橙色 7.5YR7/4	

Tab. 12　出土土錘観察表

報告書番号	登録番号	出土位置 遺構	長 (cm)	直径 (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	胎土	焼成	色調	備考
31	019-03	SD17	4.9	0.3	1.6	11.17	やや密	並	灰白色 10YR8/1　灰白色 7.5YR8/2	
32	004-09	SD17	4.7	0.4	1.75	11.19	やや密	並	にぶい黄橙色 10YR7/3　黒褐色 10YR3/1	
33	004-01	SD17	4.95	0.3～0.45	1.25	5.91	やや密	並	灰黄褐色 10YR5/2　灰黄褐色 10YR4/2	
34	005-05	SD17	5.0	0.4	1.7	11.12	やや密	並	灰白色 10YR8/2	一部黒色に変化
35	019-02	SD17	5.1	0.3	1.75	14.83	やや密	並	浅黄橙色 7.5YR8/3	
36	005-01	SD17	6.6	0.5	2.2	27.15	やや粗	並	灰白色 10YR8/2　にぶい橙色 7.5Y7/4	
64	004-02	SD18	5.6	0.4	2.5	30.68	やや粗	並	灰白色 2.5Y8/2	
65	005-02	SD18	6.65	0.5	2.55	40.76	やや粗	並	浅黄橙色 10YR8/3　灰白色 10YR8/2	
66	002-08	SD2	3.0	0.5	1.75	7.215	やや粗	並	灰白色 10YR8/1　褐灰色 10YR4/1	
67	002-05	SD5	5.8	0.8	2.35	25.39	やや密	並	にぶい橙色 5YR7/3　灰色 N4/0	
69	014-02	SD9	2.7	0.4	1.6	4.86	やや密	並	灰白色 2.5Y7/1	
87	002-10	F3区 包含層	2.65	0.2～0.3	1.1	2.93	やや粗	並	にぶい橙色 7.5YR7/4　褐灰色 10YR4/1	
88	002-03	F3区 包含層	4.9	0.45	1.65	10.75	やや粗	並	明褐灰色 7.5YR7/2　灰色 N4/0	
89	001-08	F3区 包含層	5.3	0.4	1.5	12.10	やや密	並	灰白色 2.5Y8/1　灰色 N4/0	
90	002-09	G2区 包含層	3.7	0.4	1.6	7.11	やや密	並	にぶい橙色 7.5YR7/4	
91	002-07	G2区 包含層	3.3	0.45～0.6	1.25	4.295	やや密	並	灰白色 10YR7/1　灰色 N4/0	
92	005-03	G2区 包含層	4.25	0.35	1.45	8.66	密	並	黒色 5Y2/1	
93	004-07	G3区 包含層	4.9	0.3	1.05	4.70	やや密	並	橙色 5YR7/6	
94	002-06	G3区 包含層	3.95	0.4～0.5	1.25	4.66	やや粗	並	褐灰色 10YR4/1　灰白色 2.5Y8/1	
95	012-04	K7区 包含層	4.0	0.5	1.45	9.0	ほぼ密	並	灰白色 7.5Y8/1　灰色 7.5Y5/1	
96	005-10	L7区 包含層	3.2	0.35	1.3	4.69	密	並	灰白色 10YR8/2　淡橙色 5YR8/4	一部黒色に変化
97	005-06	M13区 包含層	5.15	0.45	1.55	11.86	やや密	並	橙色 7.5YR7/6　灰白色 2.5Y8/2 褐灰色 10YR4/1	
101	005-09	SD40	4.8	0.4	1.3	5.92	やや密	並	浅黄橙色 10YR8/4　橙色 5YR7/6	
102	005-07	SD40	3.7	0.3	1.25	4.8	密	並	灰白色 10YR8/2	
103	005-08	SD40	3.2	0.4	1.4	5.94	密	並	にぶい橙色 7.5YR7/4　黒褐色 7.5YR3/1	
106	012-02	SK4	5.0	0.4	1.5	9.7	やや密	良	浅黄橙色 7.5YR8/4　明褐灰色 7.5YR7/1 褐灰色 7.5YR5/1	

Tab. 13　出土土錘観察表

報告書番号	登録番号	出土位置 遺構	最大長 (cm)	穴径 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	胎土	焼成	色調	備考
107	012-03	SK4	5.75	0.4	1.65	14.6	やや密	良	にぶい橙色　灰白色 7.5YR7/4　10YR8/2	
108	012-05	SK20	6.8	0.25	1.0	7.8	ほぼ密	良	褐灰色　灰褐色 5YR4/1　7.5YR5/2	
109	014-05	SK23	4.75	0.4	1.9	12.42	やや粗	並	浅黄橙色にぶい橙色 10YR8/3　7.5YR7/4	
136	008-02	R22区 包含層	4.4	0.3	1.35	7.82	やや密	並	褐灰色 10YR4/1	
137	019-05	R23区 包含層	3.6	0.35	1.5	6.48	やや密(2mm以下の小石含む)	並	灰黄色 2.5Y7/2	
138	008-07	R24区 包含層	4.1	0.35	1.6	6.75	やや密	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	
139	008-03	R24区 包含層	3.3	0.3	1.2	3.92	やや密	並	にぶい黄橙色 10YR6/3	
140	008-04	R26区 包含層	2.7	0.35	1.45	5.61	やや密	並	灰黄褐色 10YR4/2	
141	009-05	S24区 包含層	3.6	0.4	1.25	4.85	やや密	並	黄灰色 2.5Y5/1	
142	008-05	S25区 包含層	3.7	0.4	1.6	6.13	やや密	並	灰白色 2.5Y8/2	
143	014-12	S25区 包含層	3.9	0.3	1.7	7.17	やや粗	並	灰白色　褐灰色 10YR8/2　10YR4/1	
144	014-11	S25区 包含層	3.45	0.3	1.35	4.43	やや粗	並	灰白色　黒褐色 10YR8/2　10YR3/1	
145	014-04	S26区 包含層	3.1	0.4	1.55	4.05	ほぼ密	並	灰白色 10YR8/2	
146	014-10	S26区 包含層	3.2	0.35	1.35	4.06	粗	並	淡黄色　浅黄橙色 2.5Y8/2　10YR8/3	
147	002-04	S26区 包含層	3.9	0.3	1.4	5.655	やや粗	並	にぶい橙色 5YR7/4	
148	001-07	S27区 包含層	6.0	0.3	1.65	12.29	やや密	並	にぶい橙色　灰白色 5YR7/4　2.5Y8/1	
149	001-03	S27区 包含層	5.9	0.5	1.7	14.06	やや密	並	橙色　灰白色 5YR7/6　10YR8/1	
150	001-02	S27区 包含層	4.6	0.5	1.8	13.47	やや粗	並	橙色 5YR7/6	
151	002-02	S27区 包含層	4.4	0.3～0.4	1.5	5.52	やや粗	並	灰白色 N8/0	
152	001-06	S27区 包含層	4.5	0.4	1.6	9.87	やや密	並	淡橙色　灰白色 5YR8/4　2.5Y8/2	
153	009-01	S27区 包含層	4.55	0.35	1.5	4.41	やや密	並	にぶい黄橙色 10YR7/2	
154	002-01	S27区 包含層	4.6	0.4	1.65	8.265	粗	並	灰白色 2.5Y8/1	
155	001-05	S27区 包含層	4.1	0.4	1.3	5.525	やや密	並	灰白色 2.5Y8/2	
156	001-09	S27区 包含層	4.4	0.4	1.4	6.93	やや粗	並	明褐灰色 7.5YR7/2	
157	008-08	S27区 包含層	4.0	0.4	1.55	6.82	やや密	並	灰白色 10YR8/2	
158	008-11	S27区 包含層	3.8	0.35	1.4	5.55	やや密	並	褐灰色 7.5YR5/1	
159	014-06	S27区 包含層	4.3	0.3	1.2	6.13	やや密	並	浅黄橙色　浅黄橙色 10YR8/3　7.5YR8/4	
160	014-08	S27区 包含層	4.4	0.3	1.3	5.45	やや密	並	灰白色　灰色 5Y8/1　5Y4/1	

Tab. 14　出土土錘観察表

報告書番号	登録番号	出土位置 遺構	最大長 (cm)	穴径 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	胎土	焼成	色調	備考
161	014-07	S27区 包含層	4.0	0.3	1.4	6.61	やや密	並	にぶい黄橙色 7.5YR7/4	
162	008-10	S27区 包含層	3.3	0.4	1.4	4.59	やや密	並	灰黄褐色 10YR5/2	
163	008-09	S27区 包含層	3.3	0.3	1.3	5.2	やや密	並	にぶい黄橙色 10YR7/2	
164	008-06	S27区 包含層	3.65	0.3	1.5	7.12	やや密	並	灰黄褐色 10YR5/2	
165	001-01	S27区 包含層	3.2	0.5	1.7	6.66	やや密	並	明褐灰色　暗灰色 7.5YR7/1　N3/0	
166	001-04	S27区 包含層	3.8	0.4	1.5	6.555	やや粗	並	浅黄橙色 7.5YR8/3	
167	014-01	S27区 包含層	2.65	0.5	2.0	6.86	やや密	並	灰白色 2.5Y8/2	
168	014-13	S27区 包含層	2.3	0.35	1.25	2.22	やや密	並	灰白色　浅黄橙色 10YR8/1　10YR8/3	
169	014-03	T26区 包含層	3.1	0.3	1.3	4.66	やや密	並	浅黄橙色　褐灰色 7.5YR8/3　7.5YR4/1	
170	009-08	T27区 包含層	4.3	0.3	1.1	4.39	やや密	並	灰黄褐色 10YR4/2	
171	009-02	T27区 包含層	4.6	0.4	1.3	5.9	やや密	並	灰白色 2.5Y8/1	
172	009-09	T27区 包含層	4.1	0.3	1.3	4.63	やや密	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	
173	009-06	T27区 包含層	4.3	0.3	1.3	6.11	やや密	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	
174	009-03	T27区 包含層	3.45	0.3	1.3	4.56	やや密	並	浅黄橙色 7.5YR8/4	
175	008-01	T27区 包含層	3.7	0.35～0.4	1.45	6.09	やや密	並	灰色 5Y4/1	
176	009-04	T27区 包含層	3.65	0.3	1.2	3.36	やや密	並	浅黄橙色 10YR8/3	
177	009-07	T27区 包含層	4.0	0.35	1.4	5.65	やや粗	並	黒褐色 2.5Y3/1	
189	019-06	排土	3.1	0.4	1.1	3.32	やや密	並	にぶい橙色 5YR7/4	
190	014-09	カクラン	5.0	0.45	1.4	5.95	やや粗	並	灰白色 2.5Y8/2	

〔遺物観察表註〕

報告書に掲載した石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、土製品、金属製品の観察表は以下の規則によって作成した。

1　観察表左端の番号は、各実測図の番号に対応する。これは、器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には番号をふっていない。従って、この番号が遺物のすべてではない。

2　登録番号は、実測図面の番号に対応している。

3　検出地点のA、B、C～は、地区割によるもので遺構平面図を参照されたい。また遺構については遺構一覧表に対応している。

4　計測値について記載した口径、高台径、残高はそれぞれ最大値をとっている。(口径＝口縁部径・高台径＝高台部径・残高＝残存部の器高) また「 —— 」は、計測できないものとしている。

5　成形・技法については、あくまでも遺物個体になされている技法のみをとりあげ、成形順序によるものではない。

6　胎土については、粗密について記し、カッコ内に石、砂粒の有無や大きさについて記載している。

7　焼成については、良・並・不良に分け、その中間に位置する場合は、ややを付記している。

8　色調については、『新版　標準土色帖』(小山・竹原編 19版　1997.1) を基準として表記している。

9　残存の度合は、遺物を完形としてみた割合によって%を用いて表している。「 —— 」は、表しきれないものについて使用している。

10　備考の欄については、土器における装飾、特徴的な要素について記載している。

11　土錘については、最大長・穴径・最大幅・重さについて記載した。

12　石器については、石材から長・幅・厚・重について記載した。

13　石製品については、長・幅・厚について記載した。

14　金属製品については、雁首であり長・火皿径・接合部について記載した。

Ⅴ まとめ

今回の調査では、数多くの遺物を確認することができた。これらの成果を踏まえ、まとめと課題について述べたい。

1　旧石器～縄文時代について

A・B調査区から石器数点と縄文土器を検出した。全てが他の時代の遺構からの出土である。そのため、下層調査を行ったものの、旧石器～縄文時代の遺構を確認することができなかった。しかし、遺物が出土している点から、この時期に該当する遺跡が近域に存在すると考えられる。しかしながら、周辺にはこの時期の遺跡は、確認されていない。今後該当期の遺跡を確認する必要がある。

2　弥生時代について

調査対象地付近に弥生時代の遺跡は、ほとんどみることができない。しかしながら、榊原・長野川の上流域には、多く存在する。しかし、当地と周辺の遺跡との関連性については、具体的に遺物で証明できないが、調査地から弥生土器とみられる遺物が出土しており、今後周辺の発掘調査によって弥生時代の遺跡が存在する可能性を考えておく必要があると思われる。

3　古墳時代について

(1)　遺跡について

長野・榊原川から雲出川にかけての河川の両岸には、多くの古墳群や集落が存在する。調査地対岸に位置する入田古墳などがあり、この周辺に古墳を造営した人々の集落が存在することが窺える。当地である可能性は、集落の痕跡が少なく断定することができないが、調査区周辺域の今後の発掘調査によって判明する可能性は、少なくない。

(2)　新羅土器の系譜を引く瓹(54)について

新羅土器と称される土器の特徴は、スタンプによる土器の表面装飾するものである。また、日本国内において出土する新羅土器の器種構成は、長頸壺・蓋・緑釉円面硯・円面硯蓋・広口壺・有蓋椀といったものに限られている。

全国の出土範囲については、北部九州・畿内・関東域に限られており、北部九州では、鴻臚館や太宰府とみられる遺跡ないし古墳から、畿内においても墳墓ないし都城から、関東では集落遺跡から出土している。全体的にみて国家の中枢部レベルと考えられる遺跡からの出土例が多いことが窺える。

かたや三重県下においては、過去からの出土例がなく、今回のケースは集落跡とも祭祀遺構とも考えられる例であり、日本国内における関東域を除く出土例や器種・スタンプ紋様においてもまったく異なる様相を呈している。

さて、当遺跡で出土した瓹はどこで生産されたのであろうか？。この瓹は器種においても類例がなく、またスタンプ紋様についてもまったく異なることを考え併せれば県下おいて生産されたと考えるべきであろう。真っ先に挙げられるのは、この遺跡から東方に約6.5Kmのところに存在する久居古窯址群[①]であろう。しかしながら、この瓹と同一的なものがここから出土していない。むしろ違う窯址からかもしれない。

また、この周辺遺構からは都城に一般的にみられる土師器が出土しており、都城から運ばれてきた可能性もないわけでないが、むしろ模倣された土器と考えたほうがよいとみられる。

さらに、この瓹は新羅土器が北部九州～畿内～関東に分布範囲が広がる過程において、畿内と関東を繋ぐルート上の遺跡から出土しておりこの遺跡の重要性を指し示しているのではなかろうか。

4　奈良時代について

奈良時代の遺構については、明確に判断できるものはないが、調査区内の遺構から都城で一般的に出土する土器を確認している。

これらの土器は、畿内から運ばれてきたものとすれば、奈良県側から青山峠を越えてきたものであろう。奈良県方向からは、名張市糸川橋遺跡[②]で暗文土師器が出土し、雲出川下流域で雲出島貫遺跡[③]からも

出土している。おそらく、この地を経由していったと考えられる。

5　中世について

久居市は、中世においてひんぱんに歴史上表舞台に顔を出す重要な地域である。とりわけ北畠氏の一族である木造氏の興亡を窺える地域である。現在確認されている遺跡の分布状況からみても中世に比定されている遺跡は、数多く存在する。今回の出土遺物の中で山茶椀は数点あり、軒丸瓦が１点出土している。森南田遺跡北側には、室町時代以降の周知の遺跡である森垣内遺跡が存在しており先立つ遺跡とも考えてよいのではないか。

〔註〕
①『久居市史・上巻』久居市役所　1972年
②『糸川橋遺跡』名張市遺跡調査会　1991年
③伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜』　三重県埋蔵文化財センター　1998年

以下には次の文献を参考にした。
④『本宮遺跡試掘調査』本宮遺跡調査会　1973年
⑤辻富美雄『長持元屋敷遺跡発掘調査』　久居市教育委員会　1980年
⑥辻富美雄『牧遺跡試掘調査』久居市教育委員会　1984年
⑦河瀬信幸『三重県埋蔵文化財調査報告87-11』　近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告第３分冊５「戸木遺跡」三重県埋蔵文化財センター　1991年
⑧小玉道明・吉村利男『戸木城址発掘調査報告』　久居市教育委員会　1979年
⑨『三重県の地名』日本歴史地名大系24　平凡社　1983年
⑩「一志郡善応寺山１号墳について－三重県主要古墳調査－」『ふびと』第29号　三重大学歴史研究会原始古代史部会　1968年

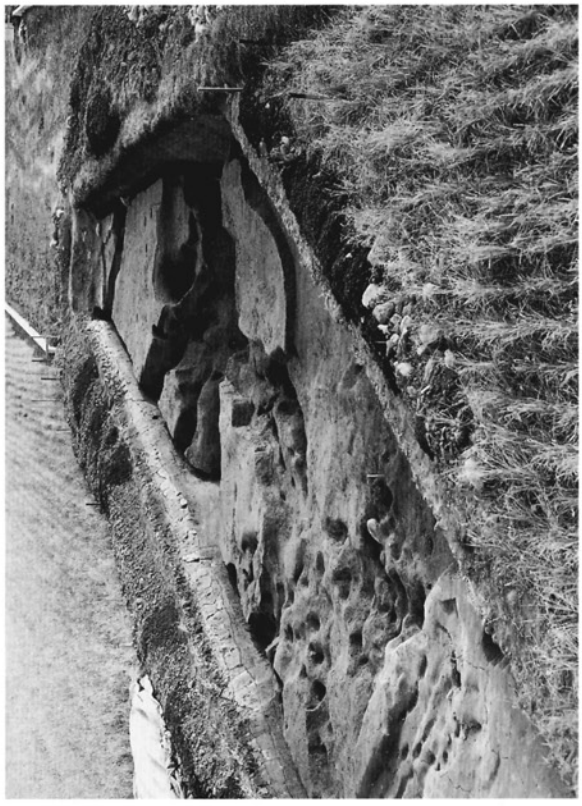
6　結語

以上にわたって、発掘調査によって得られた成果を基に今後の課題を述べた。

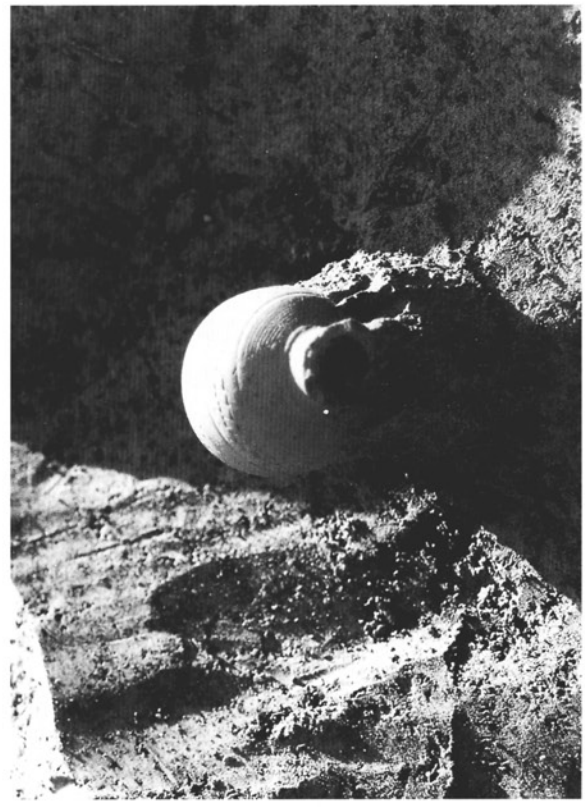
今回の注目すべき点は、多くの出土遺物を得られたことである。このことから調査地が古墳時代から重要な地域として重きを成していたとみられる。

また、榊原川・長野川・雲出川の両岸には、数多くの遺跡が密集していることを述べた。つまり、河川を利用しての遺跡の発展や交流があったみられ、今後、周辺遺跡の調査が進むごとにこの遺跡の重要性やこの地域の発展の歴史の解明に役立つと考えられる。

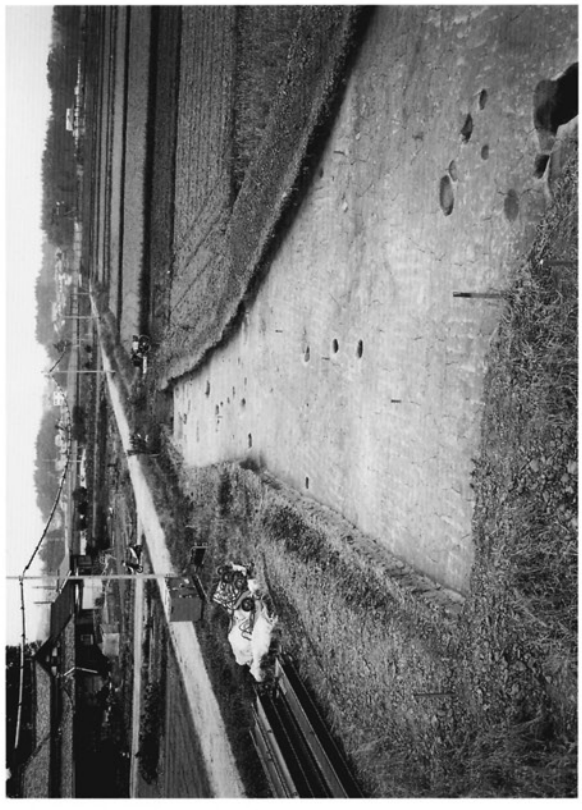
PL. 1



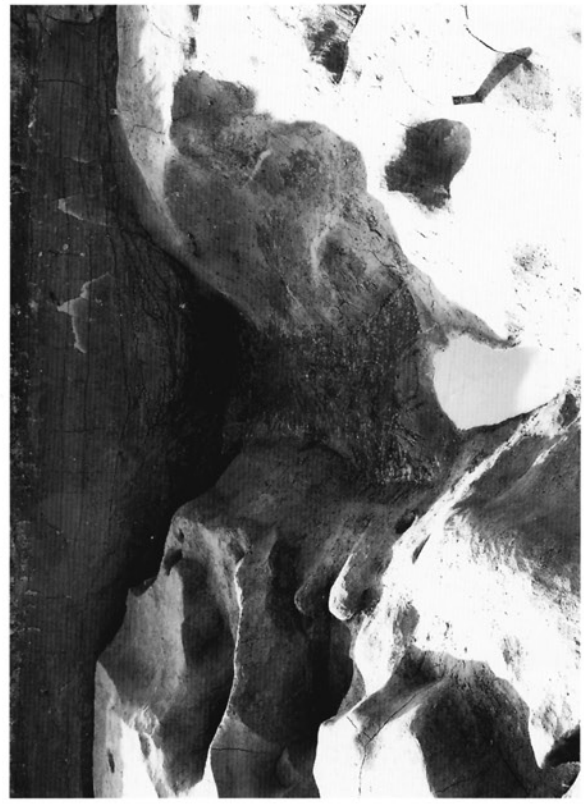
A地区南側完掘全景



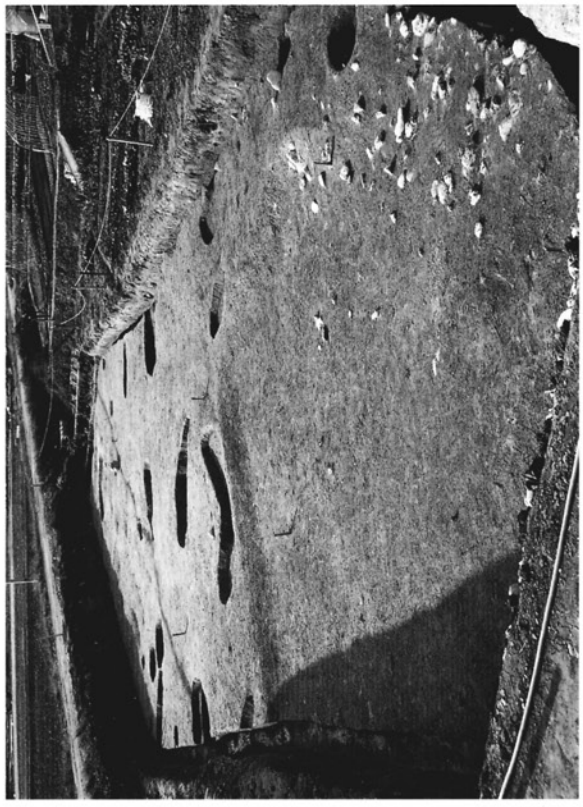
A地区ＳＤ18遺物出土状況



A地区北側完掘状況

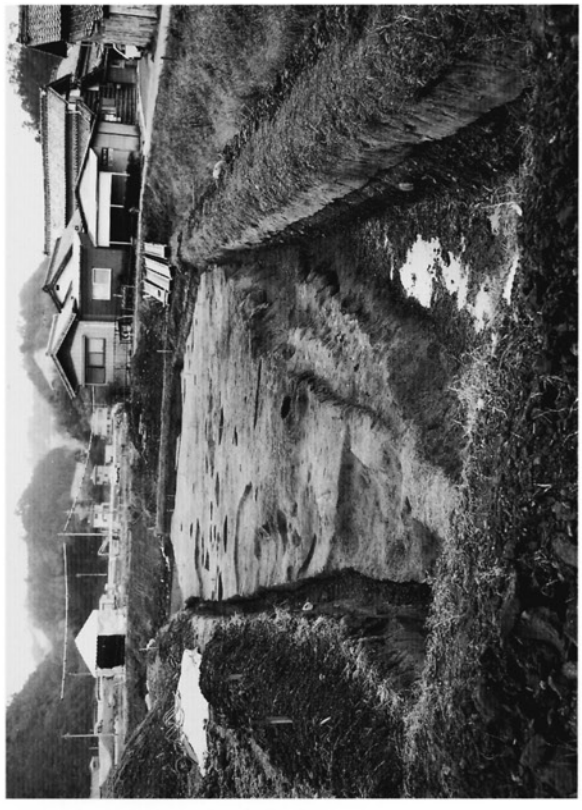


A地区ＳＤ18完掘状況

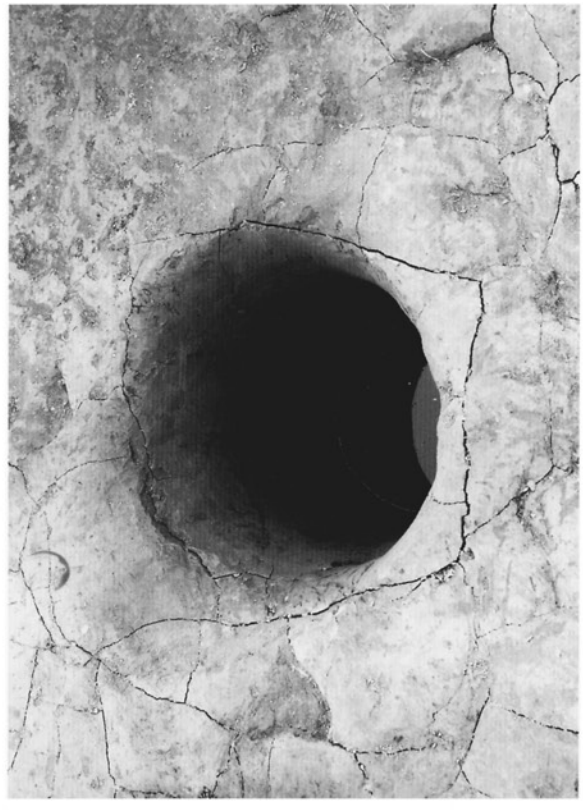


B地区南側完掘全景

南森田遺跡遠景



B地区北側完掘全景



B地区SE65完掘状況

ＰＬ．３　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	もりみなみだいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	森南田遺跡発掘調査報告
副 書 名	久居市森町南田所在遺跡の調査
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０２
編著者名	萩原義彦
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　☎0596-52-1732
発行年月日	西暦2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
森南田遺跡 （もりみなみだいせき）	三重県久居市 （みえけんひさいし） 森町南田 （もりちょうみなみだ）	24213		136° 24′ 43″	34° 40′ 17″	1998.10.22 ～ 1999.1.11	1,500	平成10年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項
森南田遺跡	集落跡	古墳時代	土師器・須恵器	自然流路
		奈良時代	土師器・須恵器・土錘	ピット
		鎌倉～室町時代	陶器椀（山茶椀）・軒丸瓦	溝
		時期不明		井戸

平成12(2000)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告202

森南田遺跡発掘調査報告

2000年3月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　オリエンタル印刷株式会社